

もったいない・おかげさま・ほどほどに、が環境と人間を育てる

も う

M・O・H通信

M・O・H Journal

- to communicate and convey the message of Shiga's traditional principles of M・O・H -

特集:「人」恩顧地心

45号

2014
Autumn



9月9日重陽の節句の飾りもの(菊)

●田中年子(たなかとしこ)

花結び作家。日本結び文化学会理事。滋賀県東近江市在住。1964~91年まで飾り結びの研究家で茶道家の橋田正園氏に師事。茶道(石州流清水派)と花結び(飾り結び)を修得し、花結び作家として独立。
TEL&FAX: 0748-55-2308

自然に対するあこがれを、一本のひもで作ってあげる四季のかたち。日本の伝統文化が息づく能や狂言、いけばな、香、茶の湯の装飾を華やかに彩る。

古代人は結び目には神の御心が宿るものと信仰の対象にした。仏教の伝来とともに、仏前を荘厳にするための花結びが伝えられ、花結びの文化は一気に花開く。

花結びは一本の紐を手で結び、花や蝶、紋などの形にする。花結びを部屋に掛けると邪気を祓い、また身に付けると幸福を招くと考えられた。平安時代には家具、調度品、鎌倉時代には武具類、室町時代には茶道、香道などの芸道に実用と装飾を兼ねて創案された。

現代の生活に使えるようにアレンジされた花結び。ペンダント、ブローチ、イヤリング、部屋の装飾用にも。全国各地で教室を持ち、展覧会も多数開催。



茶道具 仕服(しふく)の花結び(左から、かきつばた、ふじ、かたばみ、においうめ、うめ)



「M・O・H」のマーク=牛

牛は環境の象徴ともいえます。牛糞はメタンガスになり、肥料にもなります。大地を作り、食物を育て、生物を養います。私たちは命の源ともいえる、牛を「MOH」のマークとし、循環型社会の象徴とします。

★ M・O・H通信の役割 ★

持続可能で豊かな循環型社会を築く社会人の意識を向上するためM・O・H通信は情報を発信し交流を続けます

- | | | | |
|---|---|---------------------|----------------------------|
| M | → | 循環
もったいない | 他の生命を奪って得たものを使わせて頂く |
| O | → | 共生
おかげさま | 人は一人では生きられない、環境によって生かされている |
| H | → | 抑制
ほどほどに | 欲はほどほどに、良き環境を作り上げるために |

contents

目次

特集:「人」恩顧地心

M・O・H巻頭言

幸せ経済、幸せ社会を求めて 森 建司 …… 4

M・O・Hな店 近江八幡編 (和たす)

寄り添う夫婦、支え合う地域 小川 与志和 & 貴子 …… 5

① M・O・H対談

持続可能社会のための人づくり 武村 正義 & 森 建司 …… 10

② M・O・Hレポート

伝統技術・小原かごの継承者 太々野 功 …… 17

③ M・O・Hレポート (近江鉄道 ほほえみ園)

ほほえみ園が子どもの感性を拡げる 石原 綾 …… 25

④ M・O・Hレポート (地域おこし協力隊)

「ムラサキ」を栽培して地域を元気に! 前川 真司 …… 31

⑤ 寄稿 (前出産業)

山への恩返し～薪ストーブ編～ 前出 博幸 …… 37

⑥ 寄稿 (大森まちづくりカフェ)

地域情報紙が人をつなぐ、まちをつなぐ 鵜飼 修 …… 41

環人ウォーク①

仰木における棚田保全活動の視察 …… 47

環人ウォーク②

あいとうふくしモール視察レポート …… 51

里のお話

ゆきあい 三山 元暎 …… 54

漫画

山暮らし子育て日記 オノ ミユキ …… 55

M・O・H旅日記

南あわじの神話史跡を訪ねて 井上 昌幸 …… 57

インターナショナルメッセージ 一独逸

ドイツの誇りと国民性 原 修子 …… 59

第8回 MOHせんりゅうコンテスト 2014 …… 61

本の紹介 …… 62

講演日記 …… 63

4コマ漫画

にこやか …… 64

イベント紹介 …… 65

M・O・Hニュース …… 67

通信概要 …… 69

読者の声 …… 70

表紙
「湖南市の豆腐屋さん」
福山聖子
●ふくやま しよつこ 朝日新聞滋賀版などに、近江の暮らしの風景を絵と文で連載。画文集「夕げの匂い」オレンジ色の空―近江の日々を描いて(工房森のしずく刊)



「人」 恩顧地心

恩を顧みて心は地に宿る
暮らしの中で恩を忘れずにいけば、心は土地に宿るよ
うに自然に溶け込めますよ、という意味を込めた造語。
(2013.11 編集部)

観音の里(長浜市)黒田の秋。
黒田官兵衛ゆかりの地



今の時代にあつて、多くの人を「幸せにする経済」ってなんだろう？人が生きていく中で、より多くの人が「幸せと感ずる社会」とはどんな社会だろう？

私は学者でも有識者でもない。以下述べることは間違っているかもしれないが、それも市民の思いの一つとして受け止めて頂ければ幸いである。

この世に生を受け、様々な生涯を過ごしている私たち人間が、何を幸せと感じ、何を不幸と感じているのか、おそらく無限のケースがあるだろう。誰がどのような状況の下でそれを感じているのか、一概に言えないが、幸せと感ずる人が、どのような価値観、倫理観、人生観をもってその思いに至ったのか、その事例を一つでも多く知るとは、幸せを求めているわれわれにとって、良いヒントが提

供されることになる筈だ。

今の経済社会では、企業間競争がますます激化して、勝者が敗者を飲み込み、ますます寡占化、大型化が進んでいく。その大量システムこそが、競争(戦争)の強力な武器となつて、社会全体を覆い尽くす。世にいう「経済合理性」

幸せ経済、幸せ社会を求めて

森 建司

時が来ている。

そして「持続可能社会」が始まるのだ。その中で形成される「三万よし」思想で一体となった人同士の絆で出来る、自立型の経済が「幸せ経済」であり、家族や地域の人たちが共に仲良く暮らせる社会が、「幸せ社会」の大きな部分となるのではないだろうか。

科学技術の進歩は、経済成長の分野で大きく貢献した。人間の欲望に沿って開発された科学技術と経済は、ある意味で今日の多くの人間を守り育てて来た。現代に生きる私たちはその恩恵の中にどっぷりとつかつて、豊かさの幸福感に浸つてきた。しかし「有限なものには自己矛盾があり、主体は、時間の経過と共に

自己矛盾によつて止揚される」。この真理によつて「経済至上主義」「経済合理主義」とは別な義」とは別な義

義」とは別な義ければならない



寄り添う夫婦、 支え合う地域

M・O・H
な店

近江八幡編



「おいでやす〜」のれんをくぐると

おがわ よしかず
小川 与志和
たかこ
貴子

でっち羊羹・うもろ餅 元祖 和た与

滋賀県近江八幡のお土産といえばほんのり甘い「でっち羊羹」。その発祥店とされる和菓子屋「和た与」の5代目店主・小川与志和さんと貴子さんご夫妻に、育つこと・育てることをテーマにお話をうかがった。

■和た与、逢茶あまな（近江八幡市）

■2014年7月4日



でっち羊羹①、うもろ餅①

創業文久3年和たと

文久3（1863）年、和たとの創業者・小川与惣松は生まれ育った能登川を離れ、近江八幡本町通りの砂糖問屋で奉公していた。

その頃、滋賀県ではあちこちで、駄菓子として、でっち羊羹の原型が作られていた。当時、貴重だった砂糖が入りやすい環境にいた与惣松は、この駄菓子をヒントに、蒸した羊羹を竹の皮に包んだ和菓子「でっち羊羹」を販売し始めた。商品名は「でっち」すなわち、小僧さん（丁稚）のわずかなおごつかいでも、土産として買っていただけに由来することからそう呼ばれる。

150年、変わらない味

現在も和たとの「でっち羊羹」は、基本的な製法や材料は創業当時とほとんど変わらない。竹の皮に包まれた蒸し羊羹であり、気軽に買えるという商品コンセプトを守った価格、1本260円（税抜）で販売されている。

試練、そして新たな門出

創業150年の老舗「和たと」も常に順風満帆というわけではなかった。2001年、火災により店舗兼住宅を焼失し家族も失うという試練に見舞われる。

与志和さんは、「店をたまたもつか」とも考えたという。しかし、「もう一度、あの味が食べたい」という周囲の声を受け、店の復興を試みる。

その試行錯誤の中で、貴子さんという新たなパートナーも得た。

滋賀県に馴染むために

千葉県育ちの貴子さんが、近江八幡に嫁いできた当初は、知り合いもあらず、家業が中心の日々を過ごしていた。3年を過ぎた頃から「これでは、どうにもならない」と積極的に外へ出るようになり、「しが中小企業女性中央会」など、人と知り合うきっかけとなる場所に参加し、人間関係の幅が広がった。

よそ者の視点を活かして

2013年3月、近江八幡「八幡堀石

畳の小路」にカフェ「逢茶あまな」をオープン。大正時代の商家の離れを改修したしつこな雰囲気の内内で、和たとの和菓子を売ったスイーツなどを提供する。お堀の側まで歩いて降りることが出来る立地だ。

「僕は近江八幡で生まれ育ち、古い町並みやお堀を普通だと思っていましたが、彼女は出店の話がある以前から、この場所に価値を見出していたようです」。与志和さんは、貴子さんがいなければカフェを出すような挑戦もしなかっただろうと振り返る。

「関東から来たよそ者の目から見ると、この土地ならではの良さや、出来ることごとくたくさんあります」と貴子さん。

「逢茶あまな」という店名は、和たとの「和」に由来する。「和」はあまなつと読み、人の心に沁透つという意味がある。この店を観光客や地元の方にほっとしてもらいたいと思うと貴子さんが発案した。「僕は日々、仕事をさせていたいただいて、ありがたいと思うばかりです。その中で、彼女の持つビジョンを、どう現実化していくか」と与志和さん。





2



1



6



4



5



3

①この道ひと筋50年の母、和子さん②といとこの高木愛史さん③。大鍋があんをさばきやすくしてくれる ②この並び方が職人の技。無駄なく美しく ③定量をひとすくいできりとする。まさに手わざ ④一瞬で、あんが棒状に、すべるように、なめらかに ⑤一つひとつ丁寧に ⑥この道ひと筋30年の与志和さん。心を込めて封をする

まかな 賄いから生まれた名品

和たとの名品は「でこち羊羹」の他に「うる餅」もある。「逢茶あまな」では「うる餅」を用いた新しいメニューにも挑戦した。それが「揚げうるこだ」。

元々は、固くなった和たとのうる餅を賄いのおやつとして、家で揚げて食べたのが商品化のきっかけ。貴子さんが「これはおいしい！」と思い、この賄いのおやつをヒントに商品化できた。

こ先祖様のすこさを知る

開店当初は、「逢茶あまな」という店名を認知してもらえず苦労した。周囲からは「なぜ和たとの名前を使わないのか」と言われた。しかし、今でこそ知られた「和たと」の店名も150年前は誰も知らなかったはず。だから「あまな」という名前を育てよう決めた。

店を始めて再確認できたのは、商売を続けることの難しさ。お客様あつての150年ではあるものの、「こ先祖様はすこかった」と思う日々だ。



⑦ 蒸しあがったうしろ餅 ⑧ 新米の貴子さん ⑨ せいろで蒸しております。年季が入った道具たち ⑩ 八幡堀をイメージした店舗。看板は昔のままに

和たとの新商品

「和た」としては秋限定販売の栗入り蒸し羊羹「久里路ふるじ」が商品化された。この商品は、小川家で昔から食べられていた秋の味だ。与志和さんにとっては、商品として売り出すこととまどいがあった。「栗入り」は「でっち羊羹」にお在らずという発祥店としてのこだわりだった。商品名に「でっち羊羹」のフレーズを使わないという条件をつけた。貴子さんは、天秤棒を担いで行商をスタートさせ、大成した近江商人にちなみ、「久里路」という名前にした。

与志和さんがどっしりと引き受ける150年の営みと、貴子さんの新しいアイデアが重なるところに「逢茶あまな」や「揚げつるろ」、「久里路」が生まれている。

地域と共に育つ店に

店の発展と併せて地域の課題にも取り組みたいというのが夫婦の共通の志。「いろいろなかがある中で、地元の人には助けたいだき、店の価値を教えてもらったから」といふ。

賑やかな八幡堀だが、課題は多い。空き





① 逢茶あまの麻のれん ② これが噂の揚げうろ。抹茶とともに ③ 逢茶あまの店内。窓から見る町家の風情は落ち着く

家を活用して、店を始める方もおられるが、志半ばで閉められる方も。いかに継続していくかが課題だ。

先代、地域からの預かりもの

ある時、ご先祖様の遺影の中に与志和さんとよく似た顔を発見した貴子さん。一族の繋がりを実感した。以来、町中で古い空き家が空き地に変わっていくのを見ると心が痛むという。

「ご先祖様から受け継いだバトン。」「この道を進むか、止まるか、自分が決めているように、自分ではない何かに影響されている」と与志和さん。でっちゃん菓子作りは、「先祖、そして地域から預かった仕事」だと感じている。火災後、試行錯誤していた時、あるお客さんから「お前ところの商売はお前一人のものではない。滋賀県近江八幡のもの。お前一人でたたくことはまかりならん」と言われたことがあるそうだ。

寄り添う夫婦、支え合う地域の味わいが、和たとの「でっちゃん菓子」の味なのかもしれない。

口小川与志和 貴子

●おがわよしかず 1965年滋賀県生まれ、八幡商業高校卒業。中・高時代は野球部主将。甲子園を目指し猛練習の日々を過ごす。現在は滋賀県食品衛生協会青年部会長、はちまん青年経営者会顧問として地域の発展のために活動中。

●おがわたかこ 1968年千葉県生まれ、早稲田大学法学部卒業。都内百貨店勤務を経て、2006年与志和氏との結婚と同時に近江八幡へ。地元の素材や滋賀のお茶を使った新たなお菓子を模索する毎日。趣味の寺社巡りとバードウォッチングを通じて、あらためて滋賀の奥深さを実感。

○和たと

滋賀県近江八幡市玉木町2-3
TEL: 0748-32-2610
<http://www.watayo.com/>

○逢茶あま

滋賀県近江八幡市大杉町12八幡堀石畳の小路
TEL: 0748-32-5205
<https://www.facebook.com/amana.jp>

販売 久里路：秋限定（9月中旬～11月初旬）

〈「人」恩顧地心〉

持続可能社会のための 人づくり



たけむら まさよし
武村 正義

元滋賀県知事・元大蔵大臣



森 建司

循環型社会システム研究所
代表

滋賀、そして日本の未来のために私たちに何が
できるのでしょうか？ 12年間の滋賀県知事の後
に衆議院議員に転身し、内閣官房長官・大蔵
大臣を歴任された武村正義さんにお話をうかがい
ました。持続型社会に向けたキーワードは「足るを
知る」「もったいない」、そして「子どもたち」!

■旧大津公会堂 (大津市)

■2014年6月24日





「草の根自治の基礎をつくれたのですね」森氏

琵琶湖を 守るために

森 まず武村先生の滋賀県知事時代についてお話をうかがいたいと思います。滋賀県知事として「琵琶湖の富栄養化の防止に関する条例」や「ふるさと滋賀の風景を守り育てる条例」を制定されるなど環境問題に取り組みました。何かきっかけがあったのですか？

武村 私が知事に就任して2年余り経った1976年の春に突如、琵琶湖に赤潮がでて大騒ぎになりました。調べてみると、赤潮の原因が窒素とリンによる琵琶湖の富栄養化であること、そして特にリンは家庭での洗濯洗剤が最大の発生源であることがわかりました。安く

て汚れがよく落ちるから、当時は日本中でリンを含んだ合成洗剤が使われていたんですよ。粉石けんの方が少し値段が高くて、洗濯機で使うと石けんカスがつくんですが、それでも琵琶湖のために粉石けんを使おうという気運が滋賀県全体に一気に広がり、滋賀県の7割の方が自分の意志で琵琶湖のためにリンが入った合成洗剤をやめました。これは日本の戦後の歴史を飾る住民運動の一つだと思います。その運動があったから、知事として琵琶湖条例を制定できました。

森 その他にも、第1回目の世界湖沼会議を滋賀県で開かれましたね。

武村 ええ。私が知事の際に石けん運動が起こって、条例をつくったり世界湖沼会議を開いたり学習船「うみのこ」をつくったり。知事として12年間、琵琶湖の汚染を止めようというところを努力をしました。

森 滋賀県の小学校5年生が乗る学習船「うみのこ」も武村先生のご発案だったんですね！ 今も続いている、素晴らしい取り組みだと思います。





「あの頃は貧しかった先達に教わり、住民が琵琶湖を守っていました」武村氏

武村 ええ。子どもたちをどう教育するのか。教室で教えるだけではだめだ。そこで、子どもたちを船に1泊2日で乗りこませて、子どもの時に生で琵琶湖をみて体験させようと考えました。

森 武村先生が琵琶湖保全の基礎を築かれたわけですね。

武村 琵琶湖を汚さない運動はこれからずっと続けていって欲しいと思います。しかし、知事として反省すべきことがあります。例えば土地改良事業で小さい田んぼを大きい田んぼに造りかえ、碁盤の目のように道路と水路を造りました。確かに非常に仕事がしやすくなりましたが、これは環境破壊なんです。昔は、田んぼの水は上の段から

だんだんと低い方へ余った水を何回も使っていましたから、水はそれほど汚れなかった。今は要らない水を全部排水路へ流して、濁った水が琵琶湖に流れこんでいます。

森 田んぼの水を流すと、土だけでなく窒素やリンなどの肥料も流れていて、それが琵琶湖の水の汚染につながっているわけですね。

武村 農家1軒1軒、1枚1枚の田んぼで努力しないとできないですし、県民全体が協力してやっていかなくてはいけません。

リーダーに求められる 「小欲知足」の思想

森 武村先生は1993年に「新党さきがけ」で日本が目指すべき姿を「小さくともキラリと光る国」と表現されておられて、それは持続可能社会をイメージしたものだとおっしゃったことが非常に印象に残っております。また、先生が書かれた文章に「質実国家」や「足るを知る経済」といった言葉がでて



きて、現代の経済成長とは違う方向性を感じました。

武村 実「足るを知る」は2500年前のお釈迦様の言葉なんです。ちょうど同じ頃に中国では老子が、ギリシャではソクラテスも同じようなことを言っていたそうです。2500年も昔にインド・中国・ギリシャで人の生き方として「小欲知足」が説かれていたんですよ。小欲知足とは、欲望を小さく抑えて足るを知ることが大事だという意味だそうです。

森 まさに真理ですね！ しかし、お釈迦様の時代から人類はまったく進歩していない気がします。

武村 進歩していないともいえるし、そんな古い時代からちゃんと人間のあべき姿がわかっていたともいえます。2500年経った今、先人の言葉の通りに人類は生きてきたのかと問われたら、残念ながら逆の方向に走っている。今ではいわゆる成長主義、経済成長万能主義が世界を覆っていて、日本でも安倍総理大臣が「成長、成長」と言っています。

森 そういう成長が永遠に続くとか安倍総理は信じておられるのでしょうか？

武村 どの国のトップリーダーも「よその国のことは知らない。わが国は成長だ」と考えているのでしょう。世界のおおかたが貧しい途上国だった時代は特定の国だけが成長して成功できました。ところが、今や世界中が成長を目指して競い合う時代になりました。資源浪費型の経済成長、つまり石油やガスを奪い合う熾烈な競争をしながら自分の国の成長だけを考えている。

それにともなつて強引な民族主義、国家主義が一気に世界を覆っています。日本の安倍総理大臣も「積極的平和主義」などとそれに符丁を合わせるような主張をしているのを、私は残念に思っています。資源には限りがありますから、奪い合っているやがて底をつきますよ。

森 そうなると、産業界のために原子力発電所が必要だという意見の人がますます増えそうです。原発などあってはならないものなのに…。

武村 原子力利用について科学技術は

まだ成熟していないと私は考えています。例えば原発内で放射能を出している燃料のエネルギーが落ちてくると、まだ放射能を出している状態で水の中に浸けている。これが使用済み燃料棒で、この棒が各原発に何百本もあるんですよ。まだ放射能をどんどん出しているのに、持って行き場がないから原発の片隅に置かれている。使用済み燃料棒ですら

いかに管理するのか、科学技術がそこまで進んでいないんですよ。ましてや福島第一原発のように廃炉にしたなら、最終的にはドロドロに溶けた核のゴミが出ます。それがまだ十万年もどんどん放射能を出し続ける。これをどう取り出してどこへ持っていくのか、まったく目処がたつていません。科学技術の面でもまったく展望がありません。

森 原発賛成の人は、放射性廃棄物の処理についての研究がいずれは完成するだろうと考えているのでしょうか。

武村 そういう楽観的な期待で世界中がどんどん原発を増やしているんですよ。いったん火をつけて放射能を出し始めたら止めようがない。ある種、

神様の領域に人類が手を出して手に負えなくなっている。恐ろしいことです。経済界の原発賛成の意見はそういうことまで考えていないのでしょうか。

私は明日から原発を全部止めるとは言わないけれども、原子力に替わるエネルギーを早く開発して原発を減らしていつて、なるべく早く原発のない日本にすべきだと思っています。

未来へ目を向ける

森 原発の話もそうですが、今の社会はすべて経済的思考が前提になっています。持続可能社会に移していくためには、こうした経済至上主義・経済合理主義をやめないといけない。そうしなければ変わらないと思っています。

武村 そもそも資本主義なるものが持続可能なシステムなのかどうか？ かつては、森さんがされているCSRのように企業の利益の一部を社会に還元する、社会に貢献するという気持ちを持つ方が少なくなかったと思います。ところが、だんだん金さえ儲ければいい、

利潤さえあげればいいという時代になって、みんなが金儲け主義に走ってしまっで、環境や資源の面でも持続不可能な社会になっている。

森 では、これからの日本のために私たちはどうすればいいのでしょうか？

武村 現在の政治は経済政策最優先で、二つの大きな問題にあまり目が向けられていないと思います。一つは人口減少問題、もう一つは日本の国の借金が1000兆円を超したことです。1000兆円は世界でずば抜けてトップです。

税金のレベルで仕事をするのが財政の原則なんだけれども、税金以上に借金をしてどんどん金を使うという不健全なことを日本は30年間ずっとやってきました。国の税金は1年間で50兆円くらいしかありません。50兆円しかない経済力で20倍の1000兆円の借金を積みあげてしまっで、これはもう返せない額ですよ。赤字財政だけみても日本の将来はまったく明るくない。これはきわめて深刻な問題です。われわれはもっとそのことを認識しないといけないし、そういう目で政治家を監視

しないといけない。

森 国家投資をすれば経済が活性化して成長するというのは、経済学ではケインズ理論というそうですね。そういう考え方が巨大な財政赤字の主な原因ではないのでしょうか。

武村 おっしゃる通りです。ケインズの考え方は、不況の時には借金をして経済を活性化させ、景気が良くなったところからサッとその借金を返すというもの。ところが、日本は景気が悪い時に借金をして、良くなって知らん顔をして借金を続ける。国は国民に対して年金や医療といったサービスをしていますが、景気が良くなったから税金を増やしますよとか、年金を半分にしますよといったら国民は怒りますから、そんなことはできない。いったん借金をしだすと借金財政が続く。そういう悪循環に陥ってしまったっているんです。

森 なるほど。例えばリニア新幹線を走らせるのも景気刺激策なのかもしれませんが、なぜこの時代にそんなことをやるのかという思いがあります。

武村 国民のみなさんも、もう少し財政



のことを考えて発言して欲しいと思います。何兆円もかかるリニア新幹線を早く着工するという声が多いですけど、インフラや公共投資はみんな借金にながっていきますから。

今はデフレだからということ、アベノミクスの三本の矢の一本目は金融、二本目は財政、三本目は成長戦略となっています。二本目の財政で「積極財政」とか「公共投資」と言っていますけど、それは「借金」でやることなんです。森 未来を見ている気がしますね。

武村 その通りです。その場その場、その時その時が良ければいいという発想でやってきているんですよ。

森 私は親父から「おまえ一代で儲けようなんて思う必要はない。それよりも何代にもわたって信用をつないで販売を続けるのが経営者だ」とよく言われました。今、私どものような中小企業の廃業が増え、地域経済の衰退が問題化しています。そこで農業（6次産業）をはじめ、地域産業を回復し、地産地消型の中小企業を育成して地域を活性化させよう、そのために跡継ぎを育て

ようと「300年経営塾」という勉強会を始めました。なかなか評判がよくて、若い人たちが入ってきてくれていてるんですよ。

武村 将来も存続していける事業経営という森さんの堅実なお考えは素晴らしいですね。

子どもたちに社会教育を

森 持続可能な社会をつくっていくためには、投票権を持ち消費者でもある市民の意識が変わらないといけないと思います。そのために、どういう風に指導者を育てていけばいいのでしょうか？

武村 何かの知識を教えたほうがよくというものはありません。人をつくらなくてはいいけませんからね。学校の教室で教科書を開いて教えるというよりも、子どもにさまざまな社会活動を経験させて、理屈抜きで「もったいない」「ものを大事にしないとイケないこと」をきっちり教えこむ。頭ではなくて身体で覚えこませることが大事だと思えますね。

森 経済界としてはものを捨ててもらわないことには次の消費が生まれませんから、ものを大切に方向へなかなか行きませぬ。

武村 世界経済が壊れて全人類がもう一度貧乏のどん底に落ちたら、「もったいない」精神は放っておいても復活する。しかし、豊かなままで「もったいない」精神をどう培うのか、小欲知足の社会をどうやって実現していくか？

そのためには学校教育が大事です。世の中の指導的な立場にある人が少しでもそういう心がけを先鞭せんべんをつけてやっていただきたいです。

森 私は「ほどほどに」という言葉に、共生社会をつくるためにはみんなが欲望を抑制して、武村先生がおっしゃっているように「足るを知る」思想でお互いが譲り合っていかなければいけないという思いをこめています。これからのいろいろアドバイスを頂けませんかでしょうか。

武村 はい。

森 滋賀と日本の未来について貴重なご提言をありがとうございます。



「私たちは、現状を正しく認識し、政治を監視しないと…」とムーンババの愛称をもつ武村氏

省。1969年埼玉県地方課長、1970年自治省大臣官房調査官から滋賀県八日

武村正義
すべつ、
人が
すべつ、

● たけむら
さよし 193
4年滋賀県生
まれ。1958
年東京大学教
育学部卒業後、
同大学新聞研
究所を経て19
62年同経済
学部卒業。19
62年自治省
(現総務省)入

■武村正義の知事力

- 著者／関根英爾
- 発行／サンライズ出版
- 価格／1200円+税
- 内容／いま求められる「ほんもの」の「知事力」とは？「最もやりがいがあったのは知事時代」という。琵琶湖の環境政策をいち早く推進した武村氏の知事力を明かす。



件簿「サンライズ出版」。

● もりけんじ 1936年滋賀生まれ。滋賀県立長浜北高校卒業。新江州(株)取締役会長。滋賀経済同友会特別幹事、滋賀経済産業協会相談役など。
著書／『吃音はななる』遊タイム出版、『循環型社会入門』新風舎、『中小企業にしかできない持続可能型社会の企業経営』サンライズ出版、『中小企業相談センター事件簿』サンライズ出版。

勇氣源
いの壁を打た破れ
森建司

市市長を経て1974年滋賀県知事(1986年6月)。1986年衆議院議員当選(4期)。1993年6月自民党を離党し「新党さきがけ」を結党、代表に就く。内閣官房長官(細川政権)。1994年大蔵大臣(村山政権)。現在、日中友好沙漠緑化協会会長、龍谷大学客員教授など。
著書は「草の根政治―私の方法」(講談社)「小さくともキラリと光る国・日本」(光文社)「私はニッポンを洗濯したかった」(毎日新聞社)など。
近刊に「聞き書 武村正義回顧録 御厨貴・牧原出 編」(岩波書店)。
TBS「時事放談」に時々出演。



伝統技術・ おはら 小原かごの継承者

ただの つとむ
太々野 功

高時川源流森と文化を継承する会 会長

● 生活に欠かせない「かご」。その素材は竹やナイロンといったさまざまな種類がありますが、小原かごの材料は木の幹です。え、木でかごが編めるの…？この製造技術を継承するのは太々野さんただ一人。小原かごにまつわる歴史や伝説、太々野さんが伝えたい昔の生活をご紹介します。

■太々野邸（長浜市余呉町）

■2014年6月20日



小原かごってどんなかご？

小原かごの特徴はなんといってもその材料だ。カエデ科のイタヤカエデやモミジなどの木を薄く削ったものを編んで作られる。弊誌代表の森氏も、おやつ入れなどに小原かごを愛用している。

現在、その製造技術を受け継ぐのは太々野さん一人だけ。ポリ袋の普及や安いかごが簡単に手に入るようになり、小原かごを使う人も作る人もいなくなってしまうのだ。

2008年に旧余呉町（現在は長浜市に編入）で立ち上がった「小原かごを復活させる会」では、かご作りの後継者の育成や特産品の開発を進め、全国に小原かごの存在を広めようと技術講習会などが定期開催されている。太々野さんは技術指導の講師として活躍中だ。

小原かごの原点は琵琶湖の北部、旧余呉町の小原集落にある。丹生ダム建設予定地となったことで1994年に全戸が移転し、今は廃村となった。

小原かごはこの地で1960年代頃

まで作られていた。豪雪地帯である小原は冬になると農作業ができないので、村民は冬の間かご作りに従事していたという。

技術の流出を防ぐため、作り方は家の長男にしか伝えられなかった。しかし太々野さんは次男だ。

特に作り方を教わったわけではなく、幼い頃から近所のおじいさんが作っていたのを見よう見まねで覚えたそう。

「お兄さんはあまりかご作りが好きじゃなかったし、父親は養子に



小原集落、豊かな自然に囲まれた小さな村落だった



②



①

① 年を重ねると深い色合いに、マユカゴ(大)、キンチャカゴ(中)、チンカゴ(小) ② イタヤカエデの原木と太々野氏。いい材料(きれいに割れる)を伐ってきたときはうれしい ③ 原木を木槌(きづち)で叩いて割っている ④ 包丁でさいてうすい板状にして元の板をつくる。ここが難しい ⑤ 編む。かごにあった元の板を選んで作る ⑥ 丸みを帯びたかごになる。きれいなかごになると楽しい



④



③



⑥



⑤





小原かご教室。熱心な生徒さん達

来ていたからそこまで一生懸命にやらず、自分の使う分くらいしか作らんかった。わしは小さい時からかご作りを見るのが好きやったさかい、自然に身についとったな」と太々野さん。小学校に上がる前にはその技術を習得していたというから驚きだ。

かご作り

かご作りは材料の調達からはじまる。代表的な材料となるイタヤカエデは、

粘り気があつて柔軟性もあり、薄く削ったり曲げたりしても丈夫な木だ。山に入り、木を選ぶと根元から1メートルくらいまでの部分を伐る。「材料になる良い木は、ゆっくりねばりを含んだ感じで割れていきます。まつすくな木より、もともと曲がっている木を活かした方が、かごの丸みを作りやすい時もある。モミジの木も質は良いけれど、使える部分が少ないですねぇ」材料選びにもセンスが必要だ。伐ってきた木は、なたや包丁などを

使つて1本ずつきれいに整えられ「元の板」になる。元の板とはかごを編む時の材料のこと。これをたくさん作つておいて、かごを編む際に最適の元の板を選んで作つていく。

かご作り教室でもこの技術を教えているが、元の板を均等に削る作業は大変難しく、参加者は皆苦労しているそうだ。伝統技術の継承には長年の経験も必要となる。

こうしてきめ細かく編まれるかごは水を漏らさないほど優れた品質となり、強度もあるので50年ほど使えるそうだ。

いろんなかごがあります

用途によってさまざまな形状をしているかご。いろんな呼び名があり、それを知るだけでもおもしろい。

「これ、お店でお金を入れておくかご。昔はレジもないし、このかごを天井から吊るしてお金を入れていた」

そういつて太々野さんが見せてくれたのは、網目がとっても細かくて表面が

鉛色に輝くゼニカゴ。昔は長浜市内の商店や居酒屋でよく見かけたそうだ。「ハリカゴとツギカゴは高級なかごやで。ハリカゴには針仕事の道具、ツギカゴには端切れ布を入れる。嫁入り道具なんや」

ほかにも、ナタを入れるナタカゴ、子どものおやつを入れるチンカゴ、底にゴザや木灰を敷いて子どもを入れるフゴなど、たくさんのカゴの種類がある。(弊誌32号、オノミユキ氏の漫画の中にも竹製のフゴが登場している！)

「丈夫なかごにしようと思ったら柿渋を塗ったりしたな。これを塗ると表面に少しツヤが出る。柿渋を塗らなくても、イタヤカエデで作ったかごは使うほど磨きがかかって味がでてきますよ。人間でもかごでも磨かなあかんで(笑)」と太々野さんは笑う。

小原かごの伝説

小原集落には、小原かご誕生にまつわる伝説が語り継がれていた。

今から800年ほど前、土御門天皇



紐三種、シナの皮⑤、シナの縄④、麻の緒(お)⑥



鉞(なた)とナタカゴ

と陰明門院いんめいもんいんの間に生まれた皇子は生まれつき体に障害をもっていた。そのため陰明門院と皇子は宮中を離れ、お供の人たちと一緒に人目を避けて小原の山中で暮らすことに。

皇子の様子に村人たちは最初驚きを隠せなかったが、次第に同情するようになり、「白子皇子」と呼んで一生懸命お世話をしたそう。

村人と苦楽をともにするようになった白子皇子は、ある日、山でモミジ科の木が薄く剥ぎ取れるのを見て、木かごを編むことを考案した。これを村人に教えていったことが小原かごのはじまりと伝えられている(諸説あり)。若くして生涯を終えた白子皇子、58歳で生涯を終えた陰明門院。二人の墓は旧余呉町内にある菅山寺の境内に残されている。

材料が採れなくなってきた

太々野さんの悩みは材料調達ができなくなってきたこと。

「かご作りには材料調達が欠かせへん。」



今でもたまに山に入つて木を見たり空気を吸つたりするとホッとします。でも最近では身体が動かなくなつてきて、山に入るのも難しくなつてきた。それに、今の山は整備ができてへんから木がどんどん成長していく。太い木はかご作りに適さんのや」

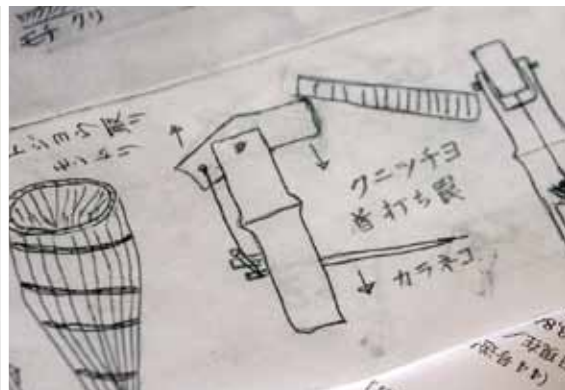
昔は炭焼きや伐採で山に入る機会が多かった。伐採した山から若木が生まれ、15〜16年でその木がまた成長してかご作りに「良い木」となる。しかし今は、終戦後に進められた植林の整備が十分にされず、木が密生した山になってしまったという。「もつと木を伐つて「良い木」をつくらなあかん」と太々野さんは訴える。

昔のくらしを伝えたい

絵を描くことが好きだという太々野さんは、昔の生活道具などを絵に描いて残しているそうだ。そのノートを見せてもらうと、道具の絵と名称、その使いなどが丁寧に記されていた。



稲刈り後に活躍する道具たち



「モンドリを打つ」ドジョウやウナギをとる仕掛け④ 小動物を捕獲するクニツチヨ④

「これはクニツチヨという首打ち罫。ネズミとかスズメとかを獲った道具。こつちは引俵。スズメを一網打尽に獲れたんよ。多い時で20羽くらい。当時は貴重なたんぱく質になったな」と、興味深い話が盛りだくさん！

そのほかにも、生命力豊かな野菜は、自生して子どもたちのおやつになる。トマトは学校帰りによくちぎつて食べたそうだ。

住民が支え合い、自給自足の生活が小原にはあった。太々野さんはこういった生活文化も伝えていきたいと思っている。

夢は尽きません

「小原かごを復活させる会」の活動をする一方で、「高時川源流の森と文化を継承する会」の会長も務める太々野さん。小原集落を含む高時川源流域にはトチノキやブナなどの巨木が多く残されており、このような巨木群を地元グループが主体となって保全していくために、2013年に設立された。

昔の暮らし 太々野功氏聞き取りメモ

平成26年6月20日

〈小原かま〉

イタヤカエデの幹を薄く削り編む、日常に役立つかま(しゃつくり)

山仕事の野良着。縦糸は麻横糸は木綿の古着を裂いて使う

〈すげみの〉

スゲ(草)で作った蓑(みの)。雨の時に使用した

〈やすつぼ〉

お正月に飾る直径5cmほどのおぶくさん(お供えものを入れる容器)。玄關柱や背戸の両脇に供える。ゆずり葉に雑煮や煮豆を入れる。スズメが食べにくるので、ついでにスズメもいただく

〈クニツチヨ〉

首打ち毬。獲物はむしってありがたいただく

〈春のにおい〉

下肥を畑の肥料にしたので種を蒔く春にはかなり臭った

〈セニカゴ〉

お店でお金を入れるかま。

ふくだや、のんきやで使われていた

〈ツボカゴ〉

200年前から、東浅井まで木之本の店が卸していた。昭和20年で20000円、30000円

〈よき、なた〉

山仕事に欠かせない刃物。蔓を払ったり、枝を打つのに重宝。道具はお手製でも研いだ

〈タケのみぎら〉

タケを四つから六つに割って並べて編んだ板敷物をひいて神様にお参りするときなどに使う

〈おいなりさんのおこない〉

おいなりさんはキツネがゴ本尊で繭の神様。ヒトがキツネに扮して(しっぽのよくなものをつけて)山を下る

〈アユのなれずし〉

10cmほどのアユを塩漬けし、なれずしにした

〈小鮎のなれずし〉

小鮎を塩漬けし、なれずしにした

〈捨て、トメ、ヨシ〉

子だくさんの家庭に見られる名前

〈普山寺文書〉

小原かまの生みの親の誕生を記す

〈高時川源流森と文化を継承する会〉

小原地区の伝統的な小屋をつくり、イベント交流をする。トチノキの巨木林で話題になる。先祖さまから受け継いだ暮らしぶりを鋭意記録中。山の暮らしの伝承と継承をめざす

〈栃と餅〉

トチの実で栃餅づくりの講習をする野本寛一氏の著作で勉強中。トチは縄文時代から食される伝統食。灰汁出しは文化技術といえるほど難しい



在りし日の太々野邸



あの頃の暮らしのヒトコマ。娘さんがご懐妊中



仕事小屋にて、太々野氏[㊦]と森氏[㊦]。二人は同世代

「旧小原集落周辺に広がる貴重なトチノキの巨木林を守っていききたいし、食文化ではこの地域に伝わる薬草の利用の仕方を考えていきたい。自分で動けんさかい、人にやってもらわなあかんけど。やりたいことはいっぱいあります」
太々野さんの夢は尽きない。

読者の皆様へ

「皆さんにお伝えしたいことは、ものを大事に使ってもらいたいということなんです。今は使い捨ての商品が多くなってきています。古くてもそこに価値を見出して、ものを大切に使うってほしい

と思います」

美術工芸品として注目されている小原かごも、もともとは生活必需品として大切に使われていたものだ。ものを大切にし、古いものに魅力を感じてほしいと願う太々野さんの想いはM・O・Hの精神に通じる。

先憂後集 太々野功

●ただのつとむ1936年生まれ。余呉町小原に生まれるが、小原が丹生ダムの水没地区となったため故郷を離れる。中学校卒業後は炭焼きや材木業を行っていた。1967年に日本電気硝子高月事業所に入社し、1996年に退職。2006年より小原かごについての調査を開始し、2009年には「小原かごを復活させる会」が発足。2013年に「高時川源流森と文化を継承する会」が発足し、トチノキの巨木林をはじめ廃れてしまった山村文化の継承活動を行う。

③ M・O・Hレポートへ「人」恩顧地心へ

ほほえみ園が 子どもの感性を 拡げる



いしはら りょう
石原 綾
ほほえみ園 園長

琵琶湖東部の南北を結ぶローカル線・近江鉄道は、地元住民から“ガチャコン電車”の愛称で慕われています。この近江鉄道が保育園を運営しているってご存知ですか？ 電車やバスでお散歩したり、改装された電車の中で遊んだり、とても楽しそう！ 若くして園長を務める石原さんにお話をうかがいました。

- 近江鉄道直営保育園 ほほえみ園（彦根市）
- 2014年7月1日



近江鉄道のゆるキャラ・がちゃコンと一緒に園内保育園で

**子育てを応援したい！
安心安全な「ほほえみ園」**

近江鉄道グループの歴史は、1896年から始まる。鉄道やバス、タクシーをはじめとする交通事業、八幡山ロープウェイや琵琶湖観光船などの観光事業、自然公園の施設運営など、地域に密着した事業を展開している。

愛称「ガチャコン電車」の由来は電車の走行音から。少々にぎやかな列車に揺られながらも、みんな愛情をこめてそう呼ぶのだ。

そんな近江鉄道が運営する保育園「ほほえみ園」は、2011年7月に誕生した。JR彦根駅東口から徒歩1分という利便性の良い立地で、同じビルの3階には近江鉄道の本社がある。

「子育て応援プロジェクトとして、安心安全な保育施設の提供と、働くお父さんやお母さんたちのサポートを目指して事業がスタートしました。近江鉄道が属する西武グループのスローガン『でかける人を、ほほえむ人へ。』にちなんでほほえみ園と名付けられました」

若くして園長を務める石原さんは、園が生まれた経緯をこう語る。

認可外保育である同園は、登録を行うことで月極保育（平日・一日）と一時預かり保育を利用できる。

「年度途中に引越してきて保育先を探している人や、忙しい時にちょっと預かってもらいたい人などに利用してもらいやすいと思います。少人数制なので一人ひとりへの細やかな保育ができますし、園内のお子さんの様子が携帯・スマートフォンからいつでも見られる『みえますねっと』というサービスも導入しています。お母さんたちから安心できると喜んでもらっていますよ」と石原さん。近江鉄道直営だからこそ、**「安心安全」**にこだわっているそうだ。

**電車の中が保育園!?
「ほほえみパーク」の魅力**

開園1周年を迎えた2012年7月、ほほえみ園のすぐ横にある彦根駅東口構内近江鉄道ミュージアム内に、子ども

何して遊ぼうかな～。仲良しほほえみキッズたち





近江鉄道本社1階のほほえみ園とほほえみパーク。ラッピングデザインのえみちゃんがほほえむ



電車の中で遊べるなんて…。車両の有効利用(ほほえみパーク)





JR彦根駅に隣接する近江鉄道本社



手遊び中。保育参観



中村隆司社長を表敬訪問。勤労感謝の日



がちゃこんは、キツネがモチーフ
(でんしゃ de おさんぽ)

たちの遊び場として電車1両を改装した「ほへみパーク」がオープン。かわいくラッピングされた500形車両は、以前まで活躍していた本物の電車。滋賀県立大学の学生がデザインしたという外観には、同園のキャラクター、えみちゃんなどの楽しいイラストがちりばめられている。

車内には、ままごとコーナー、絵本コーナー、吊り輪コーナーなどが設置され、子どもたちが楽しく遊べる工夫がいくつかある。

「ここには庭園がないので、遊び場がほとんどありませんでした。すぐ隣に展示していた電車を活用して遊び場にできないかと、近江鉄道の社員とほへみ園の保育士と一緒に考えたんです。掃除から改装まで、全部自分たちで作業しました」

つり革や座席なども一部当時のまま残され、遊び場として生まれ変わった電車の中で、子どもたちは思いっきり遊ぶことができる。まさに鉄道会社ならではの取り組みだ。

🚋 お散歩も一味違えます

「交通機関との連携を活かして、他の保育園ではできない行事を企画しています」と石原さんが教えてくれたのは、月に1度の「でんしゃdeおさんぽ」。子どもたちは園を飛び出し、近江鉄道が運営する電車やバスに乗っているような場所に「おさんぽ」に行く。

「先日は電車に乗って五箇荘駅の近くの公園まで行きました。そこには近江鉄道と新幹線が並走するビューポイントがあるんですが、子どもたちは電車や新幹線が大好きなので並走するようすを見て大興奮！」と石原さんもとて嬉しそう。

他の地域に出かけるということは、色んな地域を知り地域を好きになることにつながるのだという。「でんしゃdeおさんぽ」は、子どもたちが「今度はお父さんやお母さんと一緒に行ってみたい」と思えるきっかけになることも期待されている。

🚋 楽しい行事もりだくさん♪

鉄道機関をつかった行事は「でんしゃdeおさんぽ」だけでなく、親子遠足でも楽しめる。毎年、彦根港での琵琶湖開きにあわせて船に乗って訪れるのは、パワースポットとしても有名な竹生島。「なかなか行く機会がないと思いますし、家族や友達と一緒にに行けるのは貴重な体験だと思います」と石原さん。親子遠足や保育参観にはおじいちゃん、おばちゃんも参加されることも多いそう。

勤労感謝の日には、近くの消防署や警察署、近江鉄道の本社を訪れて感謝状を贈っている。子どもたちが来ると、その様子に癒されて事務所の雰囲気が一気に明るくなるのだとか。

🚋 子どもの力は無限大∞

認可外保育だからこそ、子どもたちの成長につながる保育を目指したいと石原さんはいう。



「何してあそぶ？」 石原園長

「保育スペースが一部屋しかないので、どうしても異年齢保育になってしまいます。年齢の違う子どもたちと一緒に保育するのは難しいこともあります。異年齢だからこそ、思いやりが育つ環境になっていると思うんです。上の子どもたちは、お兄ちゃんお姉ちゃん精神が芽生えて下の子どもたちの面倒をよく見

🚗 明るい保育園に していききたい

てくれますし、下の子どもたちはそんなお兄ちゃんお姉ちゃんを見て自立心が芽生えます。子どもたち同士でいい刺激になっていきますし、そういうことは遊びの中で生み出される。子どもたちの吸収力は無限大ですね」

石原さんは今、園長として2つのことにチャレンジしている。

1つはスタッフ間の風通しを良くして働きやすい職場をつくること。前任までの園長は保育経験のない社員が担当していたが、保育士である石原さんが園長を務めることで、保育士間の意見を吸い上げ、会社につながるパイプ役になりたいという。

2つめは地域の人と触れ合う機会をつくって、ほほえみ園を広く知ってもらうこと。月に数回園を開放し、子育ての不安や悩みを、親同士や親と保育士で共有できたらと考えている。

「園長だからこそできることがあると

思います。保育士が働きやすい職場であること、お父さんお母さんが安心して子育てできる環境をつくること、子どもたちのためになります」

多様なライフスタイルの中で、子育てを応援するしくみづくりは必要だ。鉄道と保育を結んだ近江鉄道の社会貢献。いつか「ほほえみ園出身です」という近江鉄道社員が誕生するかもしれない。

まいにち えがおじ

石原綾

● いしはらりょうじゅ 1990年10月1日生まれ。滋賀短期大学幼児教育保育学科卒業。2011年6月近江鉄道ほほえみ園入社。2014年7月よりほほえみ園園長を務める。

○ 駅前保育園「ほほえみ園」

滋賀県彦根市古沢町1-8-1

TEL: 0749-221-3333

<http://www.ohmitetu.co.jp/hohoemien/index.html>

「ムラサキ」を栽培して 地域を元気に！

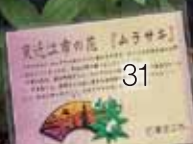
— 農に生きる若者の想い

今年の春から地域おこし協力隊員として東近江市奥永源寺地域にやってきた前川真司さん、27歳。絶滅危惧種に指定されている同市の花、「ムラサキ」の普及を通して奥永源寺を元気にすることが目標です。お話をうかがっていると、農に人生をかける前川さんの熱い思いがひしひしと伝わってきました。

- 奥永源寺地域おこし協力隊、前川邸（東近江市君ヶ畑町）
- 2014年6月18日



まえかわ しんじ
前川 真司
地域おこし協力隊



ある日、限界集落に
ひとりの若者がやってきました

東近江市奥水源寺地域は7つの集落からなり、君ヶ畑集落はその最奥にある。木地師^{きじし}※発祥の地としても知られ、木地師の祖・惟喬親王^{これたかしんのう}にちなんだ寺や石碑が今も残る歴史の集落。

深い山の林道を進むと、山懐^{やまなつこ}に抱かれた、ひっそりとした里山が現れた。川のせせらぎと鳥のさえずりが響き、まるで遠い昔にタイムスリップしたよう。

「この大自然が最大の魅力！ここから見る朝日は拝まずにはいられませんよ！」

元氣いっぱい迎えてくれた前川さんは、今年4月に移住してきた地域おこし協力隊員。移住するまでは同市内の八日市南高校で臨時講師をしていた。

地域おこし協力隊は、都市圏内から農村地域に移り住み、地域の課題解決や住民の生活支援をしながら地域の活性化をはかる取り組みで、総務省が制度を担っている。

前川さんが来るまでの過去数百年、



木地師の匠の技が展示されている

君ヶ畑ミニ展示館
が目印



君ヶ畑町への移住者の記録はなく、今は約50軒のうち30軒が空き家となっているばかりか、平均年齢も70歳を超えている。この限界集落で、前川さんは同市の花「ムラサキ」の栽培とそのブランド化に向けて奮闘中だ。

※木地師^{きじし}はろくろと呼ばれる工具を使って椀や盆などの木工品をつくる職人。

〔万葉ロマン〕

昔の人も愛したムラサキ
どんな花？

初夏から夏にかけて、白くて小さな花を咲かせるムラサキは、太くて紫色をしている根つこが特徴的。かつては紫色の染料や薬用として日本各地で栽培されていたが、現在では近縁種のセイヨウムラサキとの交雑による絶滅のおそれが高まっている。

ムラサキは万葉集の代表的な歌に登場することでも知られる。額田王と大海人皇子の相聞歌、『あかねさす紫野行き標野行き野守は見ずや君が袖振る』と、『紫草のにはへる妹を憎くあらば人妻ゆゑにわれ恋ひめやも』。

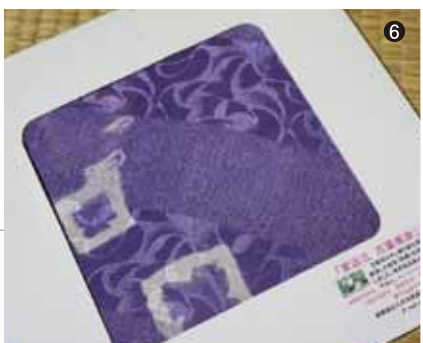
紫野はムラサキの群生地、標野は御料地であった蒲生野（東近江市旧八日市地域周辺）を指す。ムラサキが咲く蒲生野でこれらの恋の歌が詠まれたのだ。

移住してから数カ月、前川さんはムラサキの苗を植えるために荒地地を黙々と耕した。

「開墾作業は孤独との戦いでしたよ（笑）」



①「ここが大好き」樹齢100年以上の樹木が茂る ②高松御所金竜寺。惟喬親王が住み、ろくろを思いついた場所 ③御池川のせせらぎ、鳥のさえずり ④「惟喬親王に呼ばれた感がある」大皇器地祖神社にて ⑤奥永源寺のムラサキ畑 ⑥ムラサキで染めたスカーフ。袱紗(ふくさ)もある





ムラサキの花は白かった

6月には地域の人や高校の教え子にも手伝ってもらって苗を植え終わり、10月に収穫予定です。ムラサキで染色すると、とっても淡くて上品な、素朴な紫色になるんですよ。秋には子どもたちや地域の住民を対象に染物体験もやってみたいですよ」と前川さん。植えた苗の成長を見守っている。

「絶滅危惧種のムラサキと限界集落の君ヶ畑、滅びてしまいうような両者ですが、この活動を通して、地域のおじいちゃんも、おばあちゃんも、ムラサキも、元気になってくれたら嬉しいですよ。またそれに魅力を感じて若い人が集まってきたら…。ともに歩んでくれる人を増やしていきたいです」とこれからの活動に意欲的だ。

大好きな農山村で 過ごした子供時代

前川さんは、とにかく農山村が大好きだ。これまでの人生を農とともに生きてきたという前川さんのルーツを探ってみよう。

前川さんは兵庫県宝塚市の出身。都会で生まれ育ち、農業に縁のない暮らしをしていた。農業を目指したきっかけは小学校時代に経験した飼育小屋での思い出だ。1年生の時に阪神淡路大震災を経験し、仮設住宅で約3年を過ごした。心の癒しを動植物に求めたことから動物が大好きになった。当時は「将来は牧場主になりたい」と何のためらいもなく答えていた。

もともと自然を感じたいという思いから中学の3年間は高知県大川村への山村留学を決意。親元を離れ、人口400人余りの村の中で地域のおじいちゃん、おばあちゃんたちに育てられた。自然の恵み、人の温かさに溢れた農山村の生活に豊かさを感じたという。

中学3年生になり、総合的な学習の

時間で村の産業について調べることになった。農家の現状を聞き取る中で、いつも笑顔で農業や林業に励んでいた村の人たちが、安い外国製品の普及で産業が伸び悩み、生活が苦しいことを知る。みんなあんなに頑張って農業や林業を守ってきたのに…。この現状に悔しさを覚えた。

「今までは、農業や農山村ってええな一ツて、自然の豊かさを満喫してたけど、この授業を通して、これじゃあかん、こんな社会でいいのか」と自分の中で葛藤するようになりました」

前川さんの農への想いはさらに強くなっていく。

父との約束 農に生きる覚悟

大川村のような農山村を何とかして助けたいという一心で、農業高校への進学を希望するも、農業の経験がない家族らは猛反対。そんな中、「やりたいことをやらせるのが親の役目や。やるからには最後までやれ」と送り出してくれたのは父・智さんだった。

「父への感謝は一生忘れない」と前川さんは力強く語る。

兵庫県の全寮制農業高校に入学して一カ月経ったころ、智さんが突然倒れた。急性動脈瘤破裂だった。病院へ駆けつけた前川さんは、意識を取り戻した父に「農業、最後まで頑張るから」と伝え、智さんは前川さんの目を見て大きくうなずいたという。その数時間後、智さんは生涯を閉じた。

「父親が最後に示してくれた道が農への道でした。山村留学も含めて僕に色んなことを気づかせ歩ませてくれたのは父親です。この道は究めなあかんと、そのとき決心しました」と父との約束を思いながら当時を振り返った。

世界の農業を 目の当たりにシマ...

高校卒業後も迷わず農業大学に進んだ前川さんは、「食糧やエネルギー、人材」の地域循環型社会のしくみづくりを学び、大学卒業後は1年間アメリカを中心にイギリスやオランダなど、世界

中の農業を見て回った。そこでは農業に対する世界と日本の意識のギャップに衝撃を受けたという。

「実際に世界をまわってみると、都会の人こそ農村の大切さを知っておられました。『ファーマーが頑張ってくれているから、私たちはおいしいパンを食べることができなんだ』って。じゃあ、日本はどうだろう？ 大都会で農業のことを考える人はどれくらいいるのか？ 元フランス大統領のシャルル・ドゴール氏は『独立国とは食料を自給できる国のことをいう』という言葉を残しています。いくらお金を稼いでも、食べ物がないと生きていけない。食べ物の中には農村がある。そのことを考えずして都市の暮らしが豊かになるとは僕は思いません。それを多くの人に気づいてもらいたいんです」

本当にやりたかったマン

その後「これまで自分が学んできたことを子どもたちに伝えたい」と、3年間、農業高校の臨時講師として八日

市南高校に赴任。ムラサキとの出会いはこの時だった。同高校では15年前からムラサキの栽培普及活動をしていたのだ。

任期を終えようとしていた今年1月、新聞で見つけたのが地域おこし協力隊の募集記事。

「自分がほんまにやりたかったことは、これや！」

前川さんは、教育者として未来の農業者を育てることより、本当は自分自身がまだ農業に挑戦したいという想いがあつたことに気づき、夢中で企画書を書いたそうだ。

未来の子どもたちのために 集落のしくみづくりを

前川さんの最終的な目標は、未来の子どもたちに継承していく集落のしくみをつくること。今の活動が全国で同じ悩みをもつ限界集落の復活モデルになればと期待している。

「循環型社会をつくっていくには、人が何より重要なキーワードだと思いま

す。100年後の社会のあり方を考えられる「人」を育てることが大切。僕が育った大川村のようにここで山村留学生を受け入れたいし、染物体験などを通して地域の宝に触れる機会をつく

りたい。大自然の中で染み渡るように人を育てあげたいんです」
農業の楽しさも苦しさも学んできた前川さんの挑戦は、まだはじまったばかりだ。



世界にも誇れる美しい村。絶滅危惧種「ムラサキ」とともに

取材を終えて

「生徒たちからよく言われましたよ。僕の授業は実際には2時間でも、4時間くらいに感じるって(笑)」

実は、大学時代に弁論大会で優勝した経歴を持つほどの雄弁家。

明るく前向きな前川さん。一緒に農業を盛り上げてくれる仲間を募集中！

夢がある

●まえかわしんじ1987年、兵庫県宝塚市生まれ。小さい頃から動植物が大好きで、中学時代に山村留学をする。そこで農村の豊かさに感動し、全寮制の農業高校へ進学。東京農業大学で経済学を学び、卒業後はアメリカを中心に世界中の農と環境について学ぶ。帰国後、八日市南高校の臨時講師を経て、協力隊に就任。





びわ湖環境ビジネスメッセにて出展

山への恩返し～薪ストーブ編～

まえで ひろゆき
前出 博幸

前出産業株式会社 代表取締役

「海苔あぶっというて」「はいはい、あっ！ムリ」「？」「オール電化」。そう、我が家のキッチンには火がない。なので、パリッとした香ばしい焼き海苔で、炊き立ての銀シャリを巻いて食べられない。ああ、火が・・・。

火は、もっともシンプルなエネルギー。食や団らんや、温もりや、危険を教えてくれる。命を維持する自然のエネルギーに着目した人が前出さんだ。薪ストーブをツールに新たな市場に挑戦する。



薪ストーブパンフレット
Mark αカタログ



山が遊び場、育ちの場

私の生まれ育った場所は、近江八幡のもっとも田舎であるびわ湖に近い島学区といつところですか。幼少のころから遊び場所は、びわ湖と島学区を囲む山々でした。よく近所のお兄ちゃんに連れられ裏山に入り、夏にはセミ、カブトムシ、クワガタなどの昆虫を取りに出かけたり、冬の雪の日は、ビニールの肥料袋を片手に山道を滑り台代わりにして何回も上っては滑つてを繰り返したものです。また年中通して山の中に秘密基地なるものを作り、楽しかった思い出があります。中学に入学し、クラブで帰りが遅くなると、地元の各家の煙突からモクモクと煙がでていたことを今も鮮明に覚えています。我が家も中学2年までは家におくどさん（薪をくべて煮炊きするかまど）と五右衛門風呂があり、山からいつも薪を調達していた記憶があります。祖父とよく薪割りした思い出が残っているほどです。しかし高校生になり、このころから少しずつ私の中で目に見える世界が広がり、当時は、誰もがそうであった

ようにこの田舎から離れることばかり考えて大学は東京に近いところを選びました。それからもう35年が経ちますが、今では再びこの生まれ場所に住み、この場所が大好きでならないように感じています。

蓄熱式薪ストーブ

十年程前から次第に自分の生まれ育った場所に恩返しをすることが心の中に芽生え始めていました。それは今思えば「Tバブルが弾け、経営者として路頭に迷う私を癒してくれたのが生まれ育った場所の山、水（びわ湖）、そして地域の人々であったからです。そんな想いを持った

① 昔の松明(たいまつ)祭 ② かつて松明が立った場所 ③ 昔、庭でニワトリを飼っていた ④ 現在の島学区、遠望



3



2



1





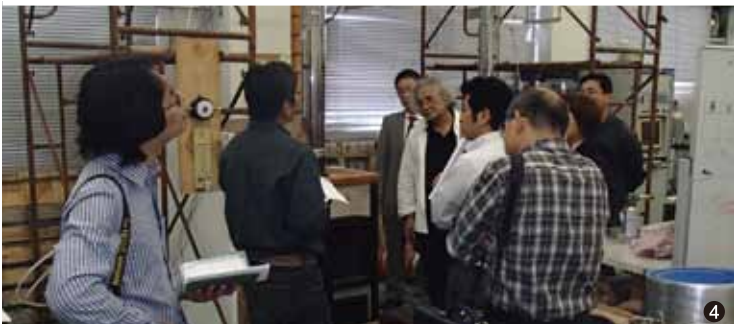
③



②



①



④

①開発1号機 ②現在のMARKα-1 ③東海大学にて実験中 ④立命館大学の実験施設にて

まま時は経ち、またまた声をかけられる機会に恵まれ5年程前に東近江市が主催する勉強会に参加させて頂きました。それがきっかけで田舎でしかできない産業(しごと)を知ってしまったのです。また、ちょうどそのころ世間はリーマンショックで私には時間もたつがり(？)ありました。この2つが重なったことで、持ち前の行動力と、深く考えるスイッチがオンになりました。まずはバイオマスエネルギーを通して知り合ったメンバー、薪ストーブの販売・設置をされているマックスウッ드의回渕さんに声をかけ、滋賀県の補助金を頂いて日本発(初)の蓄熱式薪ストーブの

開発に取り掛かることになりました。コンセプトは、「針葉樹を主燃料にできる」薪ストーブ」です。

📌 針葉樹をつかう

日本で間伐される木は、戦後の木材需要急増時に植林されたスギ・ヒノキなどの針葉樹です。林道に近く重機が入るところの用材は建築等に使われていますが、ほとんどの針葉樹が搬出に採算が合わない、木径が小さく用途がないということで放置状態になっています。あわせて倒木が腐りメタンガスを発生させるため環境を悪化させています。この不要な間伐材を燃料に薪ストーブを創ろうという事です。現在日本で普及している薪ストーブの多くは鑄鉄製で、その燃料は、まほろば 榎はらけ 樺などの広葉樹です。

📌 600°Cの壁

鑄鉄製の薪ストーブで針葉樹を使用した場合、燃焼温度を300〜400°C・本体温度300°C程度になるように調節することが必要です。これが難しいのは、いとも簡単に600°C以上になり、



鉄製の部材が変形してしまつたからです。そのため針葉樹を主燃料として利用できる薪ストーブには①タール、木酢、煤煙の発生が少ない900℃以上の温度で燃焼が可能であること、②900℃以上でも耐えうる材料で構成されていること、③高温・短時間で薪を燃やすため、発生した熱を蓄熱できる部分が必要であること。これらの3つの条件が必要なのです。

信楽焼きに着目

現在、北欧を中心とする海外で右記の条件を満たしている製品として、フィンランド製ソープストーンを使用したものや、耐火レンガを使用した現場施工品（ペチカ）などがありますが、いずれも非常に大きく、かつ重さも1t以上となり、しかも高価であるため、日本ではほとんど普及していません。

巨大であるといつのは日本の住宅事情から考えると致命的欠陥です。そこで日本の住宅環境に合った、小型で、針葉樹を燃やしてもタール・木酢・煤煙の発生が少ない蓄熱式薪ストーブ（できれ

ば蓄熱部には信楽焼き）を創り出そうと考えました。

東京で売れた

1年目は耐火レンガを使ったシンブルなものができましたが、商品としては程遠いもので終わりました。開発2年目になると想いは通じるもで、立命館大学の方から協力の申し出があり、この薪ストーブの燃焼状態を論理的な解決方法で解決していくことができるようになり、飛躍的に燃焼効率を上げることができました。

昨年の2013年からは、大学内に実験施設を構えてもらって日々燃焼実験を行うてもらっています。コンセプト立案から6年目の今年7月によつやく販売にこぎつけることができました。1台目のお客様は、地元でなく東京八王子の幼稚園でした。でもうれしいものです。

まだまだ続く

今こつやつて振り返ってみると少しでも山への恩返しをするように薪ストーブを創ることが私の人生の中で決まってい

ていたようにも感じます。

これが山への恩返しの第1弾です。小さいころから見守ってくれていた山の神様に恩返しすることが、地元への恩返しになるような仕事づくりを、今後もちやって生きたいものです。山への恩返し第2弾を楽しみにしてください。

**人生は魂の修行
前田博幸**

●まえで ひろゆき 1962年滋賀県近江八幡生まれ。千葉大学工学部画像工学科卒業。三田工業株式会社、京セラ株式会社でプリンターの開発研究に従事。1996年前出産業株式会社入社。1997年より現職の代表取締役。滋賀県中小企業家同友会理事。趣味は釣り、特にバスフィッシング。

○前出産業株式会社
本社・上田事業所
滋賀県近江八幡市上田町1-2888-18
TEL: 0748-337-1647
<http://www.maede.co.jp/index.html>



情報紙の編集会議

⑥ 寄稿く「人」恩顧地心く

地域情報紙が人をつなぐ、 まちをつなぐ

う かい おさむ
鵜飼 修

NPO法人 大森まちづくりカフェ 代表理事

NPO法人 大森まちづくりカフェは、東京の品川駅から二駅目「JR大森駅」を中心にしたエリアで活動するまちづくり団体。地域情報紙「大森まちづくりカフェ」(季刊、2万部)の発行を中心に、多様な人々が関わり様々な活動を展開する「コミュニティ・ビジネス」を行っている。近年は経済産業省のまちづくり情報サイト「街元気」に紹介されるなど、女性が輝くまちづくり活動として注目されている。





タブロイド判4ページ。話題のお店、まちの歴史、団体紹介、人物紹介で構成。広告収入で収支のバランスをとっている

自分たちが自慢できる
「まち」へ

活動エリアの大森は「日本考古学発祥の地」として有名な場所。モース博士が汽車の窓から眺めていて貝塚を発見したことに由来する。その汽車の線路が現在のJR東海道線と京浜東北線。新幹線の停車するJR品川駅からわずか二駅目（6分）と、都心に暮らすには大変便利な場所だ。

大森まちづくりカフェ（以下、まちカフェ）の活動は2004年4月、そうした、便利でただ単に住む「まち」から、自分たちが自慢できる「まち」へ、という思いをもった人々が集まったのがはじまり。2002年秋に開催された大田区主催のワークショップをきっかけに、コミュニティ・ビジネスの勉強会を通じて活動イメージを膨らませ、関わる人がそれぞれの得意分野を活かして、小さくてもお金を廻しながら継続的な活動をしよう、と団体が結成された。

そうしたスタートから10年目で事業規模は1500万円。専従スタッフ1名



1



3



2

① まちあるきはまちカフェの基幹事業（羽田福稲荷めぐり）② OTAふれあいフェスタで毎年担当している「ふれあいどうぶつランド」の様子。このエリアだけで1日に1000人の来場者がある ③ まちカフェで開発したグッズ。もりもりくんストラップとOAIR（おおたアーティスト・イン・レジデンス）トートバッグ

担当理事制で、 「できること」をやる

の団体に。最初に志を共有した理事をはじめたくさんの人々の関わり、支援を受けて徐々に成長してきた。

まちカフェの活動は、スタート当初から「無理なく」が合い言葉。もちろん実際は多少の無理や努力は必要だが、無理してまでやろうということはしてこなかった。例えば「3ミットメント・シート」の利用。イベントの損益分岐点・最少催行人数を決め、その人数を超える参加申込みがなければ中止というルールになっている。また、多彩な理事が集まっているのでそれぞれの「やりたいこと」と「やれること」をタイミング良く具現化することが活動のポイントでもある。お金の為だけではなく、携わる人の「やりがい」「いきがい」を大切にしている。



4



6



5

④人材育成事業のひとつ「まちカフェ夜学」。まちづくりに関する勉強会を月1回のペースで年10回開催 ⑤⑥総会時に行うスタッフを含めた交流会とビジョンマップ作成の様子。意見をカードに書き出し模造紙に貼り(KJ法)意見をまとめていく。この時出た意見で、できることはすぐに実行に移す



工事完了時に商店街の副会長さんが挨拶。商店街としても、まちカフェの活動に期待しているとのこと



平成25年6月から事務所を商店街に移設。内装工事はセルフビルドで

そうした担当理事制で発足当初に設定されたのは、まちあるき、イベント、情報紙、人材育成、地域支援の5つの事業。この5つがそれぞれに連携し、柱となつて活動を支えている。例えば、まちあるきで発見したことが情報紙のネタになったり、情報紙を配っていたらデザインの仕事（地域支援）の依頼が来たりなど、現在でも事業間連携や理事の情報交換が活動の要となつている。

8年目で思いを実現 アートプロジェクト

この5つの事業に、平成24年度から「アート事業」、「国際交流事業」、「被災地支援事業」の3つが加わつた。

アート事業は、「アートの力は世界共通」「アートがすむまち」をコンセプトに、活動を展開。大森アート・ヴィレッジプロジェクトでは2月～3月の期間で「大森アートフェスタ」を開催し、地域のアーティストがネットワークしてまち全体をアートにする活動がはじまつている。さらに25年度からは「おおた

アーティスト・イン・レジデンス」の活動へ展開し、羽田空港を有する国際都市大田にちなんで海外のアーティストを招いて町工場でのスタジオやワークショップなどが開催されている。

このアート事業は担当している理事の8年間の思いが実現したもの。団体発足当初から「アートの活動がしたい」と言い続けてようやく実現した。実現のポイントも、もちろん担当理事の思いが大切な要素であるが、団体の基礎力アップとそれに伴い行政や外部からの信頼を得るようになったこと。地域のアーティストの連携や区の助成金の獲得などは、そうした実力が伴わないと実現は難しかった。

女性とベテランが 活躍するまちづくり

外部の方々が団体の特徴として驚かれるのが「理事の年代構成」。20代から80代までの全年代13名の理事と2名の監事で役員が構成されている。現役のサラリーマン、主婦など職業も多様

女性による日替わり喫茶「おおたOrganicFarm」を運営



である。理事会では年配者が若い人の意見を尊重してくれる。もちろん自分自身のアイデアの提案もするが、「無理のない良い活動に」という視点での確かなアドバイスがなされる。そうした世代間の連携プレーも継続的な活動ができてきた要因である。

役員の4割が女性だが、現在日々活動するスタッフ14名（マネージャー2名、事務局2名、情報紙編集員4名、日替わり喫茶6名）は、全員女性で子育て中のお母さん達を中心。このスタッフのネットワークでさらにサポート要員が10名程度存在する。平成22年度からは理事、スタッフが一同に会する「交流会



交流会の最後は持ち寄りのパーティ

を総会にあわせて開催。ワークショップを開催し、「ビジョンマップ」づくりで、まちカフェの未来を一緒に描くとともに、互いの連携の新たなきっかけともなっている。

☕ 花子とアン・・・

まちカフェでは、地域団体等からのマップやチラシのデザイン委託を請け

つなぐまちデザイン

●つかい おさむ 東京生まれ。彦根市下石寺と東京都大田区の2地域居住。2006年滋賀県立大学大学院に設置されたまちづくりの担い手「ミニミニ・アーキテクト」育成プログラム「近江環人地域再生学座」を担当。滋賀県内、大田区大森、南三陸町田の浦、福岡県大牟田など各地でまちづくり活動を実践。著書に「地域診断法」新評論（共著）、「小舟木工」村ものがたり」サンライズ出版（共著）、「ミニミニ・ビジネスのすべて」ぎょうせい（共著）、など。

負っているが、先日、NHK連続テレビ小説「花子とアン」の村岡花子の記念館がある大森界隈のマップの制作を受注した。イラストが好評で担当した女性スタッフも大変励みになっている。まちを舞台にした活動なので大変なことも多いが、そうした小さな喜びや自己実現、自己成長の場を継続・拡大していくことが「自慢できるまち」の創造につながる。

○NPO法人大森まちづくりカフェ
東京都大田区山王3-27-6
TEL&FAX:03-55935-7881
営業時間:16時~17時
<http://www.oomori-cafe.com/>

○おおたアーティスト・イン・レジデンス
<http://www.ota-air.net/>

○大森アート・ヴィレッジ プロジェクト
<http://www.oomori-oavp.net/>

○経済産業省まちづくり情報サイト「街元元」

東京都大田区大森 女性が活躍するまちづくりNPO法人大森まちづくりカフェの取組み
<https://www.machigenki.jp/124/k-1919>



平尾の棚田

環人ウォーク①

仰木における 棚田保全活動の視察

◆日 時 / 6月1日(日)

◆場 所 / 仰木の棚田(上仰木地区、平尾地区) 滋賀県大津市仰木

◆プログラム

14:00 JR堅田駅集合

14:10 仰木集落の見学(車中より)

14:20 棚田の変遷についての解説(上仰木天社門にて)

14:40 八王寺組の取り組みの紹介(上仰木バス停前にて)

14:50 棚田での水管理、ヤギによる除草などについて解説(上仰木広野にて)

15:15 湧き水の試飲(滝壺神社付近にて)

15:40 仰木祭などの行事について解説(上仰木高野にて)

15:50 オーナー田の見学(上仰木八王寺にて)

16:10 竹炭窯の見学と解説(平尾にて)

16:30 棚田の見学(平尾にて)

17:30 意見交換会(堅田の料理店にて)

20:30 終了

◆参 加 / 15人

◆主 催 / NPO 法人コミュニティ・アーキテクトネット ワーク(環人ネット)

◆レポート / 穴風 光恵



◆課題は維持管理

6月1日(日)、大津市仰木の棚田を訪れました。

仰木は比叡山の麓、標高200m前後の丘陵地に位置し、里山環境を残す旧集落(仰木)と新興住宅地(仰木の里)が隣接する地域にあり、谷の傾斜の部分を利用し、集落を取り囲むように階段状の美しい棚田が広がっています。今森光彦氏の里山の写真集や1999年に放映されたNHKの「映像詩里山」などで広く知られるようになりました。しかし、近年は高齢化や若者層の流出による担い手不足、深刻な獣害の増加などにより、耕作放棄地が増えつつあり、棚田の維持管理が難しい状況になっています。

◆四箇村の結びつき

仰木は、明治維新後に「上仰木」「辻下」「平尾」「下仰木」の四箇村が合併して、現在の仰木地区にあたる仰木村になりました。今では、仰木〇丁目となっていますが、1200年以上続く集落では伝統行事も多く、自治会、農業組合、

森林組合、老人クラブなどは、この四箇村(4つの字)ごとに運営されています。市民運動会も四箇村対抗戦で行われるなど、字ごとの結びつきが強く、地域整備に関する多くの共同作業も字ごとに行われることがほとんどです。

今回は「上仰木」と「平尾」の棚田で、保全活動などを行う有志団体「仰木自然文化庭園構想八王寺組」と「平尾里山・棚田守り人の会」の方々にご案内いただきました。

◆おもてなし

視察のはじめに、標高約170メートルの土地に住宅が立ち並び、下からは集落が浮いているようにも見える上仰木の天社門を訪れたところ、偶然、前自治連合会長の瀧川幸作さんとお会いしました。瀧川さんは「わんら、夏みかん食うかや? 食うんやったら持つて帰ったらええわや」と仰木のことばで声をかけてくださいました。仰木では、このようなおもてなしの文化が大切にされています。

上仰木・広野地区の棚田



◆八王寺組の活動

上仰木では、「仰木自然文化庭園構想八王寺組」の上坂達雄さん、上坂雅彦さん、中川泉さんに棚田を案内いただきました。ながら、取り組み内容や仰木の歴史などについて、お話をお聞きしました。「八王寺



1



3



2

①オーナー田 田植 ②オーナー田 稲架掛け(はさがけ) ③棚田ボランティア 崩れた土手の修復

組」は「地域の農業後継者対策・農地保全・地域活性化」に向けて、自治会や農業組合と連携を図りつつ、農山村の自然と文化の魅力を掘り起こし、魅力ある地域の創造を目標に活動する上仰木の地元農家さんの有志団体です。棚田オーナー制度の運営、棚田ボランティア活動の受け入れ、その他イベントの実施をしています。さらに地元の素材で建築中の「ストローベイルハウス」(藁の壁がある小屋)を使って、活動を展開させる予定です。

❖ 水を譲り合う知恵

上仰木、広野の棚田見学では、水管理やヤギによる除草の様子を見学しました。昔ながらの上仰木の棚田では、水源が湧き水しかないため、「いざ親制度」という水管理の組織があり、「いざ」(水路)を田んぼのある地域ごとに維持管理し、大切な水を譲り合って使っています。また、ヤギによる除草では、休耕田を活用してヤギを放牧することにより、作付けしている近隣の田んぼへも猪などが寄り付かず、獣害対策になります。





7



4



6



5

④滝壺神社上流の湧き水 ⑤ヤギでの除草 ⑥竹炭 ⑦竹炭窯

純米吟醸酒「八王寺」

八王寺組では、2013年度から上仰木の棚田米を使ったお酒を作っており、売り上げの一部が棚田保全活動に役立てられます。是非、ご賞味ください。

【製造・販売元】

浪乃音酒造株式会社
滋賀県大津市本堅田1-7-16
TEL:077-573-0002



平尾では、「平尾・里山棚田守り人の会」の富永千弘さんが築造された竹炭窯を見学しまし

◆ 竹炭

その後、滝壺神社近くの湧き水を試飲し、棚田で使われる水の美味しさを実感しました。この湧き水は評判がよく、近隣の人も汲みに来られます。

◆ 水が命

た。竹炭窯は放置竹林の伐採と活用、水質の浄化、棚田からの放流水によるびわ湖の富栄養化の防止、肥効の長期化などを目的に作られたものです。本年度以降から守り人の会の有志で竹炭の製造が行われる予定だそうです。

棚田の維持管理は容易ではありませんが、棚田という地域資源をどのように地域づくりに結びつけていけるのか、それぞれの地域での取り組みに今後注目し、応援していきたいです。

人賤の森
環人ネット



里人の叡智を未来に残したい
穴風光恵

●あなかせ みつえ 2000年より大津市仰木地域をフィールドに住民の方々と密接に関わりながら、企画活動、作品発表をおこなう「地蔵プロジェクト」のコアメンバー。現在、「滋賀県立大学の大学院博士前期課程（在籍中）」、「近江環人11期生」、「仰木自然文化庭園構想八王寺組」幹事、成安造形大学情報メディアセンター職員および非常勤講師。



意見交換をするメンバー(野菜花にて)

環人ウォーク②

あいとうふくしモール 視察レポート

◆日 時 / 6月29日(日)13時～16時

◆場 所 / あいとうふくしモール ファームキッチン^{のなか}「野菜花」
滋賀県東近江市小倉町 1975-3

◆プログラム

13:00 ファームキッチン「野菜花」にてランチ

14:00 施設についての解説

15:00 施設見学(当日は外観のみ見学)・質疑応答

16:00 終了

◆参 加 / 10人

◆主 催 / NPO 法人コミュニティ・アーキテクトネット ワーク(環人ネット)

◆レポート / 丸山 紗千代



✿夢と安心をカタチに

6月29日、あいとくふくしモールに視察に訪れました。

あいとくふくしモールは、いろいろな思いをもった「個人」や「事業所」が集まり、それぞれの「特技」や「強み」「専門性」を出し合い、繋がり合い、助け合い、そして暮らしの課題に取り組み、心豊かな地域を作ろうという思いの詰まった場所です。

施設は3つあり、高齢者や知的障がい者などの働く「ならではの働き応援拠点施設」、介護を必要とする方々とその家族の暮らしを応援する「地域で安心して暮らしていくための応援拠点施設」、食を支える「福祉支援型農家レストラン」の3つの施設があります。

高齢者や知的障がい者などの働く「ならではの働き応援拠点施設」とは、「あいとく和楽」が運営する「田園カフェこむぎ」です。地元の野菜を中心に新鮮でおいしい素材を使用したスローフードが自慢のお店です。カフェ内のテーブルや椅子、カウンターはすべて「あいとく

和楽」の木工班で作ったものです。特に樹齢120年の杉の丸太で作ったテーブル3台は重厚で存在感いっぱいです。また新工房「木りん」で生産した薪は薪棚に並べられており、冬の時期になると3事業に一つずつ設置された薪ストーブで燃やす燃料となります。

介護を必要とする方々とその家族の暮らしを応援する「地域で安心して暮らしていくための応援拠点施設」とは、「NPO結の家」が運営するデイサービスセンターと訪問看護ステーション、ケアプランセンターの機能をもった施設です。1階のデイサービスセンターでは地域のお年寄りが食事や入浴、レクリエーションなどを楽しむことができます。2階には訪問看護ステーションとケアプランセンターがあり、病気を抱えていても住み慣れた地域で過ごせるようになっていきます。

食を支える「福祉支援型農家レストラン」は地域の食材を使い、地域の女性が厨房に立つて食事を作っています。メニューは月ごとに替わり、厨房に立つ女性たちが考えています。地域に受け

田園カフェこむぎ④、NPO法人 結の家④、ファームキッチン野菜花④





① 田園風景を楽しむ ② かわいいロゴ ③ 野菜花のランチメニュー ④ 薪工房「木りん」で生産した薪 ⑤ 経営面での工夫をお聞きた

継がれてきた郷土料理や高齢者の持つ知恵や食文化を継承できる機会を作ることで、それらが尊敬を集め、世代を超えて地域を愛し誇りに感じる人材の育成を図っています。

また3事業所すべての屋根に太陽光発電が設置されており、エネルギーの自給にも取り組んでいます。設置には会員から資金を募集し、売電益を年1回「三万よし商品券」で分配することにより、太陽から生まれた収益を地域へ還元する仕組みになっています。

このように、頭の中に描いている「こんな事ができたらいいな」「こんなマチなら楽しいのにな」、そんな思いを思いで終わらせず取り組み、夢をカタチに、安心をカタチに「すること」を目指して活動されています。

それぞれの思いを束ね・紡ぐとき、一つの提案が提案者のものだけで終わることなく、より高い次元に進むことができます。多様な人や意見を紡ぎマチをつくる。それが「ふくしモール」に求められています。

人賤の森
環人ネット



「食」「ケア」「エネルギー」
丸山 紗千代

● まるやま さちよ 4年間の社会人生活の後入った滋賀県立大学大学院にて、「まちづくり」「地域活性化」に出会い、これらの課題に取り組みことを仕事としたいと考え滋賀県に住みつく。現在はあいち(ふくし)モールにて働く。



ゆきあい

三山 元暎



さし絵:中川 善雄

あれほど大合唱していたミンミンゼミの鳴き声が弱くなり、盆を過ぎ八月も下旬になるとツクツクボウシが慌てふためいて夏の別れを告げている。空では夏と秋が通い路で行きかい、日中は勢いのよかった入道雲が横に流れ、刷毛で刷いたようなうろこ雲が現れる。

夜間の気温も下がり、夏草に置く露がしげくなつた。三島池近くの畦道では、炎暑の頃はいかにもげんなりとした様子を見せていた一群の露草が、葉の上に露を遊ばせ、ぼつちりと目を開いたように咲いている。

露草も露のちからの
花ひらく

龍太

ひと夏を伊吹山で過ごしたアカトンボが里に移動し、黄金色に色づきはじめた稲穂の上に戻ってきた。アカトンボは暑い日は強い光を避けるために、太陽に近づきをむけ、寒い日は体全体に光が当たるように、太陽に対して横向きに止まるといふ。

「夕焼小焼の 赤とんぼ 負われて見たのは いつの日か」

(三木露風)

美しく鮮烈な情景やねえやの背中に感じる温もりとほのかな恋慕の情を感じさせる歌詞である。

「夕焼小焼の 赤とんぼとまつているよ 竿の先」

ヒゲラシが夕暮れどきにカ

ナカナと一匹だけ鳴いている。いちだんと秋のもの淋しさを覚えた。

かなかなやかなしい夢を
みてをるか 木村恭子
夕方は家に居たくて
遠かなかな 中村菊一郎

三山 元暎

●みやま もとあき 1940年滋賀県彦根郡山梨町(現・米原市)生まれ。長浜市の理事・経済部長を経て1995年8月から2005年2月まで山梨町長。同月14日米原市誕生にともない退任。真宗大谷派真勝寺前任職。

悠々自適
中川 善雄

●なかがわ よしお 1936年生まれ。滋賀県展、長浜市展、伊吹を描く絵画展など入賞、入選歴多数あり。税理士。

山暮らし子育て日記

作:オミユキ

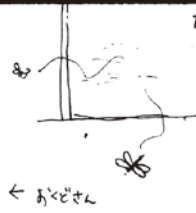
わが家は借家です。
小ぢんまりした家です。



昔々 おばあさんが
ひとりですんでたとき。



オミユキが借りた
当初、ガスも水道も
なく、



網戸もなかった。

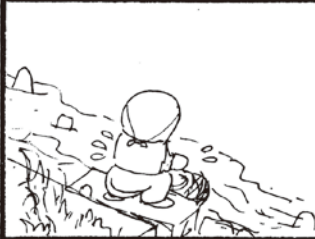
おばあさんは
一体、どんな暮らし
をして
いたんだろう...?



お隣りのおばさんに
よると、水がめに水を
汲んで料理し。



茶わんは川で洗い。



風呂は柴や薪で
わかしてたらしい。



そんな生活を
90歳近くまで
続けていた
えうだ。

スコッーイ

そして今...
この家に5人で住んで
いる。



風呂は変わらず薪で
わかすが



さすがに水道とガスは
引いた。



でもガスコンロは一口。
蛇口は昔ながらの
ひねり型



南あわじの 神話史跡を訪ねて

井上 昌幸



二神が矛で潮(うしお)を固めた「上立神岩(かみたてがみいわ)」

「約千三百年前に書かれたと言われる「古事記」には、イザナギ・イザナミノミコトの二神が天上から降りられて、沼矛(ほこ)で青海原(あまのみほ)をかき回してつくられた最初の島が淡路島であると書かれている。

南あわじ市は神話の宝庫であることを知り、友人と歴史をたどることを相談して、南あわじ市在住で「M・O・H」とのご縁がある木田薫さんに連絡をとり、現地以案内して頂ける方の紹介を依頼した。

五月二十九日に三宮から高速バスで約一時間半、福良(ふくら)に着き、木田さんの出迎えを受け、まず、国の重要文化財である淡路人形浄瑠璃を觀賞した。最初に三人による人形操作について説明があり、演目が実演された。さすがに長い歴史に育まれた伝統芸能であり、満喫することが出来た。ここで淡路人形協合理事長、玉井良徳氏を紹介されて、南あわじ市の神話の史跡を案内して頂くことになった。木田さんと「M・O・H」の間である内藤先生も同行されて、人形浄瑠璃資料館、自凝島神社、天の浮橋、

葦原の国、屯倉神社跡などを丁寧まじまじに説明して頂いた。

その日は「南淡路ダイワロイヤルホテル」に泊まり、このホテルの営業課長、関口功氏を紹介された。彼は「沼島道先案内人」として活躍されている方で、翌日我々を「沼島」に案内してくれることになっていた。

五月三十日はホテルから土生まで関口氏の車で移動して土生から沼島までは約十分間の船旅であった。この沼島には約四百五十人が暮らしており、主に漁業が中心である。この島でとれる「鰹」は京都の一流料亭に送られており、高級ブランドである。

沼島八幡神社や中宮寺では沼島の歴史などを詳しく説明して頂いた。その後、お目当ての「上立神岩」まで坂道を上り下りしながら歩いた。

この岩は二神が沼矛で凝り固



淡路人形浄瑠璃の太夫と仲間との記念写真

めたと言い伝えられている約三十メートルの高さの岩で、古代ロマンを感じさせてくれる岩礁であった。写真を見て納得して頂きたい。

今回のファイナールである「鰹すき」を紹介したい。長さが約七十センチもある鰹の骨から内臓までを名産の玉ねぎなどと「一緒に炊き、「シヤブ」ではなく「スキ」で頂いたが、地酒も入り、最高の贅沢を楽しむことが出来て思い出に残る旅となった。

皆さんは、親切であり遠来の人を暖かく迎え、神話の歴史を語ることに誇りを持つておられるように感じました。

機会があれば是非、神話の歴史を尋ねてほしい。

井上昌幸

●いのつえ まさゆき 1940年1月1日生まれ。現在、滋賀県異業種交流連合会会長、STEP21(滋賀県シニアテクニカルエンジニアリングパートナーズ企業組合)専務理事、関西師友協会活字塾講師、大津木鶏クラブ代表世話人、近江素交(そこと)会代表世話人。



ドイツの誇りと国民性

原 修子



サッカーワールドカップ優勝

2014年、サッカー世界選手権でドイツが優勝。帰国したチームの人々は大きな喜びを持って迎えた。ベルリンのブロンデンブルク門、ウンター・デン・リンデンの大道りにはファンマイルが設けられ、30万とも40万（警察は30万人までは数えたそうである）とも推定される人々が集まり、心置きなく喜びのときを分かち合っていた。ドイツの国旗も数多く見られた。

「でもね、このように私達がドイツ人であることを、ドイツを誇りに思っている事を後ろめたさなく、示せるようになったのは、2006年からなのよ」と、友人の言葉。

2006年。ドイツでサッカーの世界選手権が開催された。標語は

「Die Welt ist zu Gast bei Freunden」だ。この言葉の訳し方（ニュアンスの違いはあるかもしれないが）は、私にはドイツ人が、「世界中の皆さん、どちらの国から



お見えになられるにしても、皆さんは友人のところへいらっしやるのですよ。友人のお客様なのですよ」と呼びかけ、理解して欲しいという願いが込められているように思えた。ドイツ人が問いかけたのは「あの、第三帝国という過去を背負う私達の国ドイツ、ドイツ人を友人として受け入れてくれるであろうか。私達が今のドイツを誇りに思い、ドイツ人であると言う事を示しても、それが第三帝国が主張したものと根本的に違うのだ。受け入れてもらえるのであるだろうか？」ではなかったか。

過去に向き合う勇氣

西ドイツは第二次世界大戦後、ドイツ国民が第二次世界大戦（ヒットラーの台頭を許した事から始まりユダヤ人迫害も含めた全て）と、どのように向かい合ってきたか、なにがあのような事を可能にしたのか、自分達はなにを見逃したのか、どうして見逃したのか等々の問いを繰り返す。そしてそれを繰り返さないため

にはどのようにすれば良いのか、つまりそれら全てを含めて過去を克服出来るのかという真剣な問いに答えようとしてきた実績がある。「自分達が生まれる前の世代が犯した罪の責任をどうして何時までも問われ続けなければならぬのか？」と悩んでいた大学の学生もいた。彼等は過去と直面させられていた。そして避けなかった、逃げなかった。

そして2006年。

世界がドイツ人を友人として受け入れてくれた、認めてくれたことを知る事が出来た。

ドイツの国旗を掲げて、ドイツを応援していると言っても、そのドイツが「あのドイツ」ではないことを理解してくれるという事を知った。ましてや「あのドイツの再現や再来を望んでいるものではない」という事。

真ノ文明ハ

ドイツは今も過去の克服に取り組んでいる。世代から世代へと取り組

み続けてゆくであろう。二度とあの悲惨を繰り返してはならない。繰り返さないために、自分達の子ども、そしてまたその子どもと続いて行く世代に決して負の遺産を残してはならない。

このようなドイツの姿を見ているとふと田中正造氏の言葉が思い出される。

「真ノ文明ハ

山ヲ荒ラサズ

川ヲ荒ラサズ

村ヲ破ラズ

人ヲ殺サザルベシ」

原修子

●はらしゅうこー徳島市出身。1972年よりドイツ、アウグスブルク市在住。國學院大学文学部哲学科及びアウグスブルク大学カトリック神学科卒業。職業、通訳。翻訳。

♪第8回 MOHせんりゅうコンテスト 2014♪

第8回M・O・Hせんりゅうコンテストの候補作が決定しました。10月22日（水）～24日（金）に長浜ドームで開催される「びわ湖環境ビジネスメッセ2014」の新江州ブースで、皆様に投票していただきベスト3を決定します。ふるってご来場ください。

♪コンテスト候補作♪

- ほどほどに 足りないくらいが 丁度いい
- もったいない 滋賀をしらない もったいない
- その電気 つけてる意味ある？ はよ消しや
- おかげさま 今の生活 父と母
- もったいない 先進国ほど 食べ残す
- ほどほどに がんばるあなたは うつくしい
- 買う前に よく考えよう 必要性
- 限りある 人生だから 大切に
- 見つけよう 身近にひそむ もったいない
- 今がある 昔の人の おかげさま

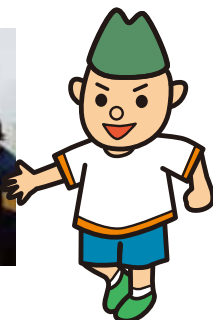


……♪M・O・Hせんりゅうコンテストって？♪……

社会倫理の浸透を目的とし、せんりゅうを通して「もったいない・おかげさま・ほどほどに」を考えるきっかけづくりをしています。今年は読者の方から78作品のせんりゅうが集まり、ベスト10選出には弊社の社員と執筆者懇談会から協力を得ました。



社内投票の集計風景



本の紹介

最近入手した、気になる本・CD・DVDをご紹介します。

BOOKS

滋賀の本



発行／京阪神エールマガジン社

価格／740円＋税

内容／もつ、琵琶湖だけとは言わせません！絶景、観音様、クラフト、日本酒、カフェ…。人が動けば街も動く。湖の国、のんびり加速中。弊誌で紹介した人やお店や商品に逢える。

暮らしを彩る飾り結び



著者／田中年子

発行／NHK出版

価格／1600円＋税

内容／滋賀県生まれの花結び作家。伝統技法の花結びの技を、現代のアクセサリ等にアレンジ。

地域ので自然エネルギー！



著者／鳥越皓之、小林久、海江田秀志、泊みゆき、山崎淑行、古谷桂信

発行／岩波書店(岩波ブックレット)

価格／500円＋税

内容／地域でエネルギーの自給自足。海、地熱、森林、世界が羨む、自然エネルギー資源大国ニッポン。

イタイイタイ病とフクシマ



著者／畑明郎、向井嘉之

発行／梧桐書院

価格／1800円＋税

内容／イタイイタイ病の教訓をフクシマへ。公害問題や原発問題に関心を持つ人へ。

湖東ライフ読本



企画／滋賀県湖東地域定住支援ネットワーク
発行／滋賀移住ライフスタイル情報発信事業

内容／「琵琶湖のほとりて暮らしませんか」。古民家を若夫婦が再生。東京からUターンした農業者など地域の人を紹介。湖北・湖東・湖西編も。

びわこはみんなのお母さん



制作／発行／富士通

内容／能登川南小学校5年生が一年を通して学んだ「こども記者講座」の成果物。一人ひとりが記者として書いた記事を掲載した白根君の原稿も掲載。

KI ESS Mail News



編集発行／NPO法人循環共生社会システム研究所
<http://www.kiess.org/>

内容／内藤正明氏が代表理事。政府が経済成長を目指す国は滅びる。は本当？ 鈴鹿でドイツでそして私たちで。一歩先ゆく環境共生を指南してくれる。

講演日記

皆様のご支援でたくさんの講演依頼を頂きました。6月～9月の講演をダイジェスト版でお知らせします。

長浜北星高校講演



- 日時：6月10日
- 演題：商いから学ぶ、持続性のある街づくりについて
- 講師：森建司
- 会場：長浜市役所東別館
- 対象：生徒
- 参加：14人
- 内容：自身の経験を踏まえ、中小企業なら

滋賀県立大学 市民参加論



- ではの持続可能な社会づくりを語った。
- 執筆者懇談会36
- 日時：6月30日
- 場所：旧大津公会堂
- 参加：11人
- 内容：45号「人」恩顧「地心」の特集を決定、今後の取材先の候補を検討した。

- 日時：7月11日
- 演題：「持続可能社会の扉をひらく市民参加」
- 講師：森建司
- 会場：滋賀県立大学
- 対象：学生

48回文月講演



- 参加：40人
- 内容：今必要な「真の市民参加」とは、市民が自ら価値観を変え、ライフスタイルを変えることであると呼びかけた。

- 日時：7月13日
- 主催：文月講演会実行委員会
- 演題：「M・O・Hの心で生きる幸せの道」
- 講師：森建司
- 会場：木之本明栄寺
- 対象：一般
- 参加：97人
- 内容：消費者と生産者と地域社会が一体と

なつて生み出す「幸せ経済社会」を目指し、M・O・Hの精神を掲げている。

健康と安心な暮らしの研修会



- 日時：7月30日
- 主催：長浜市老人クラブ連合会高月支部
- 演題：「もったいないおかげさまほどほどに」
- 講師：森建司
- 会場：高月公民館
- 対象：一般
- 参加：230人
- 内容：人生経験を積んできた人たちがだからこぞできる運動を

金沢大学社会 教育主事講習

彦根南ロータリー クラブ卓話

- 日時：8月18日
- 演題：「フアンシリテーターの役割」
- 講師：辻村琴美
- 会場：金沢大学
- 対象：受講生
- 参加：12人
- 内容：実演を交えてフアンシリテーターの役割を考えた。
- 日時：8月19日
- 演題：「ひまからでたまこと」
- 講師：辻村琴美
- 会場：ヒバシテイ
- 対象：会員
- 参加：50人
- 内容：M・O・H誕生秘話を語った。
- 日時：8月23日
- 演題：「琵琶湖を支える市民参加とは」

広め若者に夢と未来を与えたいと語った。



千葉さん家の にこやか

©サトウチユウ



- 進行：辻村琴美
- 会場：コラボしが21
- 対象：一般
- 内容：M・O・H通信の活動を軸に、市民参加で琵琶湖を支える人づくりについて意見交換した。
- 愛知郡・犬上郡管理職研修会
- 日時：8月25日
- 演題：「編集・取材を通して高める人間性」

- 講師：辻村琴美
- 会場：多賀大社
- 対象：愛荘町管理職
- 参加：50人
- 内容：M・O・H通信の編集を通して、コミュニケーションの積み重ねや情報発信でヒトとコトをつなげる重要性を伝えた。
- 近江歴史回廊大学講演
- 日時：9月6日
- 演題：「近江の魅力い

まどぎの元気な寺社見聞」

- 講師：辻村琴美
- 会場：大津市勤労福祉センター
- 対象：受講生
- 参加：169人
- 内容：近江の魅力の発見の仕方、自分の身近にある寺社に学ぶことを伝え、歴史文化を支える魅力も紹介。

講演スケジュール

- 本徳寺講演
- 日時：9月28日
- 場所：本徳寺(長浜市)
- 講師：森建司
- 演題：「M・O・Hの心で生きる幸せの道」
- 丹波市ニューツーリズム交流会
- 日時：11月5日

- 場所：兵庫県丹波市
- 講師：辻村琴美
- 内容：事例発表
- ブータンミュージアム講演
- 日時：11月15日
- 場所：ブータンミュージアム(福井県)
- 講師：森建司
- 演題：未定

美の滋賀語り部マイ★スター養成講座

主催:NPO法人コミュニティ・アーキテクトネットワーク(環人ネット)
(平成26年度「美の滋賀地域づくりモデル事業」採択事業)

「滋賀の美しさ」には地域に根付いた、何気ないけれど深い魅力があります。滋賀独特のそんな美しさを、もう一步深く知り、滋賀を訪れる人々へ伝える力をつける連続講座を開催します。全4回中3回以上の参加などで「美の滋賀語り部マイ★スター」として認証します。



◆暮らしの美

2014/10/5(日)

[会場] 近江八幡市沖島町 沖島コミュニティセンター
[講師] 上田洋平さん(滋賀県立大学)

◆信仰の美

2014/11/1(土)

[会場] 長浜市 長浜市立公民館 サンレイバー高月
[講師] 井上ひろ美さん(琵琶湖文化館)

◆街並みの美

2014/12/初旬

[会場] 近江八幡市 谷田邸
[講師] 濱崎一志さん(滋賀県立大学)

◆文化の美

2015/01/11(日)

[会場] 甲賀市甲賀町 油日神社
[講師] 大沼芳幸さん(滋賀県文化財保護協会)

◆成果報告交流会

2015/02/15(日)

[会場] 東近江市愛東地区
[講師] 豊田一美さん(A-RADIO)
中井 均さん(滋賀県立大学)

問合せ

NPO環人ネット

TEL:090-4114-3239 FAX:0749-28-0220

彦根市石寺町1263



なでしこファーマーズ

主催:なでしこファーマーズ



農に思いを持つ様々な人の交流を目指している「なでしこ滋賀ネット」。今年は「商品づくり」をテーマに交流会を行います。生産者や消費者の垣根を越えて、滋賀の農や農のある暮らしの魅力や可能性について考えていきましょう。

- ◆ ~食hana咲かそう!~
食について話す交流会2014①
2014/9/11(木)
[会場] 米原市 甲津原交流センター
[講師] 高木ひさ子さん(湖北農業農村振興事務所)・甲津原漬物加工部
- ◆ ~食hana咲かそう!~
食について話す交流会2014②
2014/11/3(月祝)
[会場] 亀王町 古株牧場
[講師] 中村貴子さん(京都府立大学)
- ◆ ~食hana咲かそう!~
食について話す交流会2014③
2015/1/24(土)
[会場] 守山市 セトレマリーナびわ湖



なでしこファーマーズ事務局
TEL:090-4114-3239 FAX:0749-72-8681
長浜市川道町759-3
新江州(株) 循環型社会システム研究所内

第4回 よばれやんせ湖北

—生産者・消費者交流会—

主催:よばれやんせ湖北実行委員会(平成26年度「長浜市市民活動団体支援事業」)

湖北地域で、ものづくり(特産品等)に取り組む生産者とそれを応援したいという思いを持つ消費者が一堂に会し、その特産品を頂きながら生産者の声や湖北の食材の素晴らしさを、地元はもちろん県内外の方へと伝える交流イベントです。



2014/11/23(日)10:30~14:30頃
[会場] 長浜バイオ大学
[講師] 堀越昌子さん(滋賀の食文化研究会)
[参加費] 2,500円



よばれやんせ湖北実行委員会事務局
TEL:090-4114-3239 FAX:0749-86-3890
長浜市余呉町中之郷260
ウッディバル余呉内



拡大執筆者懇談会が開催されました



- 日時：8月20日
- 会場：びわ湖大津館
- 参加：内藤正明さん、嘉田由紀子さん、川戸良幸さん、村上瞳さん、清水陽介さん、中塚清さん、望月麗奈さん、村上悟さん、山崎隆さん、仁連孝昭さん、花田眞理子さん、辻村耕司さん、森建司、辻村琴美、上岡瞳、酒井範夫

執筆者懇談会=拡大版の会議を行いました。目的は『もったいない・おかげさま・ほどほどに』を普及すること

です。moh活動の自主運営と具体活動の実行を目指します。

現在「moh塾」を村上瞳さんと清水陽介さん。「ツアー」を琵琶

湖汽船の川戸良幸社長。「moh sou cafe」をフタアイの望月麗奈支配人が検討中。「mohハウスを広げよう」を碧いびわ湖の村上悟さんが、検討してくださっています。弊誌の役割は認証と広報です。

コンセプトは『もったいない・おかげさま・ほどほどに』です。

当日は嘉田由紀子前知事も出席してくださいました。

皆様に参加していただきやすい活動をはじめようと、有志の方から手があがりました。

●moh塾

気の合うお友達と、もったいない、おかげさま、ほどほどに、を学びます。偶数月の第1金曜日に開催予定です。時間と場所と内容は検討中です。

■問合せ

村上 瞳さん
TEL: 090-5068-7313
Mail: meilhtm@yahoo.co.jp

●循環型持続可能社会観 光ツアー

琵琶湖汽船(株)の代表取締役社長に就任された川戸良幸さんからのご提案。琵琶湖と山と里と人を船でつなぐ。詳細は検討中。

●moh sou cafe

長浜駅の近くであればいいなあ。

こんな見つけたーその1



あらゆる管理の全体把握と情報管理ができるボードです。

ワイデクル管理ボード

1日ごとに列がスライドできるので、常に1ヵ月・2ヵ月先の予定まで管理が可能。

工程や予定は簡単に貼り替えができ、書き込む手間を省きます。ホワイトボードなので、直接書き込みができます。

設計・製造のプロ、山田製作所とデザイン企画提案のプロ、今井広告研究所が

タグを組んで生み出された『Y-decl(ワイデクル)』。『Y-decl』は管理ボードをはじめ、『3S=整理・整頓・清掃』を基本に考えた便利でムダのない“できる大人”の必須アイテムを展開しています。

■問合せ

今井広告研究所
TEL: 06-6933-2011
Mail: info@y-decl.com

棚田を守り続けるブランド『NOTO MIKOHARA』

『NOTO MIKOHARA』というのは石川県羽咋市神子原地区で収穫した農作物を取り扱うお米のブランドです。ローマ法王に献上したお米としてブランド化に成功した商品。

このブランドづくりのキーパーソンはスーパー公務員と呼ばれている高野誠鮮さん。民間から市役所に転職しさまざまな取り組みを行い、地域の活性化を実現された方です。

8月2日に開催されたNPO法人環人ネットの総会記念シンポジウム・近江環人地域



再生学座の公開特別講義では、高野さんをはじめ県内の農業者を招いて地域のブランド化について考えました。(環人ネット通信 vol.04 より)

メールで知らせる滋賀の安全・安心情報「しらしがメール」

滋賀県では、防災・防犯等の身の回りの危険に関する情報を、希望者へメールで配信するサービスを行っています。

県内の地震発生情報、気象特別警報等の情報が、お手持ちの携帯電話やパソコンに届きます。

登録はこちら

<http://www.pref.shiga-info.jp/>

■問合せ

滋賀県総合政策部情報政策課

TEL:077-528-3381

こんなん見つけたーその2 インテリア新聞ラック

ダンボールでできた新聞ラック。「新聞は第二の森林資源です」「古紙の回収にご協力を!」と書かれている。耐久性が強く繰り返し使える優れたもの。



パラパラマンガ作家紹介

本誌の左下と右下をパラパラして下さい。
何かが動きます。若手作家の力作です。

Shimo

サトウチユウコ

●しおん

(左ページ)

漫画やイラストの創作を中心に活動中。

「泣かないで」

紙飛行機を飛ばしたその先に何かあるのかを想像しながら見てもらいたいです。

●郷内ユウコ

(右ページ)

色鉛筆が好きで、マンガやイラストなどを作成している。

「秋のドット」

丸を変化させながら、秋らしい様子を表しました。



「循環型社会を目指す～M・O・H通信～」の発行に当たって

代表 森 建司

20世紀型社会は経済至上主義の時代であった。科学技術の進歩とそれに伴う工業や流通の発展は、世界的なスケールで人々に物による恩恵をもたらしたが、同時にバランスのとれた自然との共生社会を破壊した。経済至上主義とは物の豊かさを最高の幸せとして捉え、その対極にあるものの価値をほとんど消し去ろうとするものである。人々の価値観を情報操作で画一化して、特定のものに集中させようとするマーケット戦略は個人の人生観、社会観にまで侵入し、その独自性、不可侵性まで奪って行った。このことによって人々は哲学的な意味の自己をなくしてしまった。

今こそ新しい時代として循環型社会を作ろうとしているわれわれは、自己を証明する心か思いを取り戻さなければならない。死生観や人生観、先祖や子孫、生涯をかける志、自己を自己らしく生き抜くための人生哲学など。そしてそれは自然との共生社会を目指すものであり、人としての真の生き様を問うものであらねばならない。

この実現のために

「循環型社会を目指す～M・O・H通信～」を発行する。

《 M・O・H通信概要 》

■目的

- (1) 循環型社会構築に向けた意識改革
- (2) 浪費型社会通念の脱却
- (3) 人生哲学を学ぶ

■事業

- (1) 通信の発行及び出版
- (2) 講演会、勉強会、シンポジウムなどイベントの開催

■事務局

〒526-0111

滋賀県長浜市

川道町759-3

循環型社会システム研究所

TEL.0749-72-5277

FAX.0749-72-8681

e-mail:tsujimura@

shingoshu.co.jp

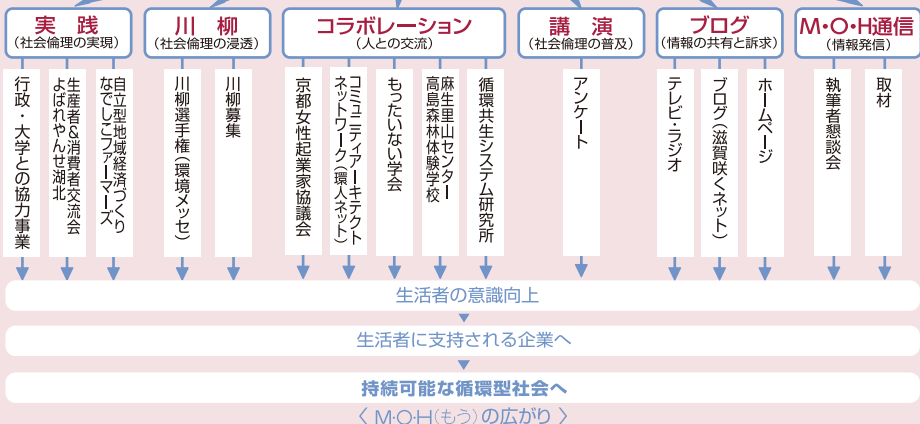
代表:森 建司

担当:つじむら ことみ

上岡 瞳

[M・O・Hコンセプトシート]

M・O・H=循環型社会をめざす言葉
(もったいない・おかげさま・ほどほどに)



読者の声

★M・O・H通信届きました。掲載して頂いてありがとうございます。

★瀬田のMUJIN STOREが面白い仕掛けだなあ、興味深かったです。

★M・O・H通信楽しみにしております。44号森先生と青山さんの対談で想像もつかないものができるのには驚きです。

★44号、コクヨ工業滋賀さんにはとてもお世話になってるんです！「ヨシでびわ湖を守るネットワーク」がご縁で☆嬉しいですね！

★美しい写真と楽しいトピックスを楽しませていただきました。特に「守り続けて次代を創る」の橋本様の、世界一を目指す伸びやかさと志に興味をひかれました。

★彦根市 伴孝子
手にとって、表紙からすでに懐かしさを感じるM・O・H通信。絆 未来、自然、地産、工夫、記事中におどる愛情とほのぼのとした人の温もり。

★京都府 長宗清司
とつても素敵に載せていただいて感激しちやいました！本当に本当にありがとうございます。辻村さんとのご縁に感謝です。

mo

★自分たちが行っている活動をこのように紹介させていただき、PRにも使わせていただきます。また、今後も頑張る勇気をいただきました。

★大阪府 奥野修
セミ生に配布し、持続可能な社会への取り組みを今日の話題にしました。若い世代にとっては、まさに自分たちが対応しなくてはならない未来です。こちらが思っている以上に考えているように思います。

★成安造形大学 大草真弓
M・O・H通信が手元に届きました。拝読させていただきました。

★7月13日に木之本での森会長の講演、参加しました。

★長浜市 伊香の退屈男
44号で物を売らなくなったら売れたという話や中小企業が口コミで広がるという噂の記事が印象に残りました。また7月13日明楽寺での森会長の講演を聴きました。

★長浜市 山岡薫
郷土の長浜で、地域活性化に多大なる貢献を果たされ、敬意を表する次第です。

★横浜府 山田学
交流会でM・O・H通信の編集長さんとお出逢いできて光栄でした。

★米原市 中村真理

《次号予定》

2014年12月発行予定

- 特集：経済・しあわせとは？
 - M・O・H新店／「手作りなカフェ」 Cafeネンリン 岡西りま
 - 対談／「もったいないで新ビジネス」 サラヤ(株) 更家悠介+森建司
 - 取材／「おいしいでしあわせつくり」 銀の森コーポレーション 渡邊大作
 - 寄稿／「地域の記憶を紙芝居に」今関信子
 - 連載／通常通り
- ※敬称略、予告なく変更いたします

編集後記

- 本号は人に焦点を当てました。難しかった。どんな人が求められているのか、どう生きたいのか、どんな仕事をすればいいのか、どう育てればいいのか？ 判らないなりに耳を傾けました。お聞きください。……こと
- 琵琶湖の北の山では「小原かご」、東の山では「木地師」が誕生しました。いづれも昔の高貴な方たちの発案。取材を通して共通点が見つかり嬉しかったです。…ひとみ
- 山あり谷あり、それでも歩み続けるのが近江商人。帰宅後、でっちゃん羹をしみじみと味わいました。……………のり



《M・O・H通信》受付中!

あなたも「M・O・H通信」を読んでみませんか。特典として、M・O・H通信、講演会のご案内をいたします。あなたの活動やこの通信についての、ご意見もお聞かせください。

お名前、年齢、郵便番号、住所、電話番号、

fax(あれば)、e-mailアドレス(あれば)、心に残った一言をご記入の上、お申し込みください。通信をお送りします。申込書をfax、郵送、mailでお送りください。

《M・O・H通信》申込書 0749-72-8681

フリガナ		年齢	希望冊数
お名前			
住所	〒		
電話	FAX	メールアドレス	
あなたの心に残った一言、MOH川柳をお書きください。			

※記入いただいた内容については、目的以外のことに使用または転用はいたしません。

キリトリ線

M・O・H通信 Vol.45(通巻46号) 2014年9月20日発行 発行部数7,000部

●編集・発行/新江州(株) 循環型社会システム研究所 M・O・H通信編集局

代表 森 建司
編集長 つじむら ことみ
編集 上岡 瞳
取材 山崎 彩
古田 紀子
穴風 光恵
丸山 紗千代
デザイン 伊達デザイン室
写真 辻村写真事務所
宇留野 元徳
表紙 福山 聖子
印刷 プランセル
ホームページ プランセル

●創刊/2003年3月度

●執筆者懇談会

内藤 正明	木村 至宏
嘉田 由紀子	小林 隆彰
海東 英和	山口 美知子
今関 信子	岡部 達平
末永 國紀	豊田 一美
花田 真理子	熊谷 英彦
弘中 史子	藤井 絢子
山崎 隆	玉垣 勝
三山 元暎	仁連 孝昭
加藤 みゆき	今森 光彦
清水 安治	川戸 良幸
森 孝之	鶴飼 修
堀越 昌子	ライオンウイリアムズ
結城 美枝子	中川 善雄
井上 昌幸	
徳永 拓美	(順不同・敬称略)

●ご協力

滋賀県	滋賀県立大学
琵琶湖環境科学研究所	近江環人 地域再生学座
もったいない学会	NPO法人環人ネット
循環共生社会S研究所	野洲生活学校
高島森林体験学校	EEネット
麻生里山センター	中小企業家同友会

(順不同)

●支援

新江州(株)
〒526-0111 滋賀県長浜市川道町759-3
TEL.0749-72-5277 FAX.0749-72-8681

★ブログ★

<http://moh.shiga-saku.net/>

★ホームページ★

<http://www.mohmoh.jp/>

MOH図書館

検索 

※記事中での写真・本文につきましては、無断転載を禁じます。

START